

平成 30 年度 筑波大学附属図書館特別展

# グローバルに挑む群像

- 幕末から明治へ -

会期 平成 30 年 10 月 29 日 ( 月 ) ~ 11 月 30 日 ( 金 )  
会場 筑波大学附属図書館 ( 中央図書館貴重書展示室 )  
主催 筑波大学附属図書館 / 筑波大学人文社会系

## 凡 例

1. 本書は平成 30 年度筑波大学附属図書館特別展「グローバルに挑む群像 - 幕末から明治へ -」(会期:平成 30 年 10 月 29 日(月)～11 月 30 日(金))の図録である。本特別展は「明治 150 年」を記念する取り組みの一つとして開催される。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序は必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛する。
4. 掲載資料の標題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 明治 6 (1873) 年 1 月 1 日以降はグレゴリオ暦により表示し、それ以前は旧暦によっている。
6. 本書は、以下の分担により執筆し、編集および校正については特別展ワーキンググループが行った。
  - プロローグ～II 山澤学 (人文社会系准教授)
  - III 谷口孝介 (人文社会系教授)
  - コラム「西南戦争と実録本」 馬場美佳 (人文社会系准教授)
  - 「長州藩士記録」「幕末関係記録」目録 山澤学 (人文社会系准教授)
7. 表紙に使用したのは、筑波大学附属図書館所蔵「横浜案内絵図:時随改正」である。
8. 資料中には、差別的・不適切な表現が資料の表記のままに記されているものもあるが、これは史実に基づいて研究をするという立場からそのまま使用したものであり、差別等を容認したものではない。

# 目次

---

目次	1
附属図書館長ご挨拶	2
人文社会系長ご挨拶	3
プロローグ 日本近代、グローバルな世界への挑戦	4
I. 条約交渉と昌平坂学問所の儒者	6
コラム「出版された五ヶ国条約と穂積陳重」	11
II. 動乱を生きた人びと	12
III. 明治を拓いた名著	23
コラム「西南戦争と実録本」	32
「長州藩士記録」「幕末関係記録」目録	34
掲載資料一覧	37

## 附属図書館長ご挨拶

---

筑波大学は、明治5年に創設された師範学校に始まり、東京高等師範学校等を経て、戦後開学された東京教育大学を前身校として昭和48年に開学しました。本学は、近代日本の黎明となった明治前半期より、およそ150年にわたる教育・研究の歴史を有しております。

筑波大学附属図書館では、平成7年度の中央図書館新館竣工の際に貴重書展示室が設置されて以来、学内組織の協力を得つつ、本学が開学以来所蔵する貴重資料などを広く公開する展示事業を行ってきました。

一昨年度は、「歴史家 二宮宏之の書棚」と題した歴史家の旧蔵書を展示し、昨年度は、「江戸の遊び心-歌川国貞の描く源氏物語の世界-」と題した源氏絵を中心とした展示を行うなど、毎年様々なテーマで特別展を開催し、好評を博しています。

今年も、人文社会系山澤学准教授の指導のもと、附属図書館と人文社会系との共催により、「グローバルに挑む群像-幕末から明治へ-」と題して、幕末・維新时期から明治前半期の貴重資料を中心に特別展を開催することといたしました。

第1部では、師範学校創設の地となった昌平坂学問所に残されていた条約交渉に関する資料と儒者について、第2部では、開国による動乱の時代を生きた人びとを、「幕末関係記録」や「長州藩士記録」を中心に取り上げています。そして第3部では、明治初期の名著を紹介いたします。各部での展示資料は、附属図書館所蔵資料から厳選した貴重な資料であり、これまで未紹介の資料も多く含まれます。

附属図書館特別展は、本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信するという附属図書館の取り組みの一つですが、今回の特別展は、「明治150年」を記念する、本学における取り組みの一つでもあります。貴重書展示室での資料展示に加え、特別展オフィシャルWebサイトから電子展示の公開も行っています。幕末・維新时期から明治前半期の世の中の動きなど、展示される資料を是非とも多くの方々にご高覧頂き、新たな世界を発見される機会として頂くことを期待いたします。

平成30年10月

附属図書館長 阿部 豊

## 人文社会系長ご挨拶

---

このたび、私ども人文社会系との共催により平成30年度筑波大学附属図書館特別展「グローバルに挑む群像-幕末から明治へ-」が開催される運びとなりました。この特別展は、附属図書館が所蔵する多くの貴重な資料から厳選し、日本近代の始まりとなった幕末・維新时期から明治前半期を中心に、グローバルな世界に挑戦した人々の姿を紹介するものです。

人文社会系は、人文・社会科学の多領域にわたる基盤的な知と領域横断的な思考をもって、現代世界の諸問題に取り組む教育研究を推進しています。各領域での確かな基盤的研究において学界の最前線に立つ一方、伝統的な領域を超え、柔軟な思考のもと、先端的な新規学問領域を開拓し、現代の社会的要請に応えうる知の発信を進めております。

私たちは本年、日本近代の画期として象徴的な明治元（1868）年から150年を迎えました。本特別展は、人文社会系における日ごろの研究成果の一つとして、学界のみならず社会に貢献するべく世界に向けて発信するものですが、本学における明治150年を記念する事業にも位置づけられております。

図録中でも述べられているように、日本の近代とは、政治・社会・経済・文化などさまざまな分野においてグローバルな世界に関わり、挑み続けてきた時代ですが、本学もまた、師範学校に始まる前身校以来、かかる時代を共に歩んできました。附属図書館にはその間に収集された数多くの文献資料が所蔵されていますが、学術的に再評価されるべきものが少なくありません。今回の特別展は、歴史学・文学を専門とする教員3名によって専門領域を横断して企画され、日ごろの基礎的研究を通じて新たな評価がなされた数多くの資料が展示されます。本特別展を通じ、幕末から明治を生きた日本人がグローバルな世界へいかに挑戦してきたのか、またその背景にはいかに豊富な教養の世界があったかが実感されるでしょう。彼らの生きた時代を学ぶことで、現代を生きる私たちに新時代を切り拓くためのヒントを与えてくれる機会にもなるでしょう。

特別展「グローバルに挑む群像-幕末から明治へ-」への多数のご来駕をお待ちしております。

最後になりましたが、本特別展の開催にあたり、ご支援・ご協力をいただきました校内・学外の皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成30年10月

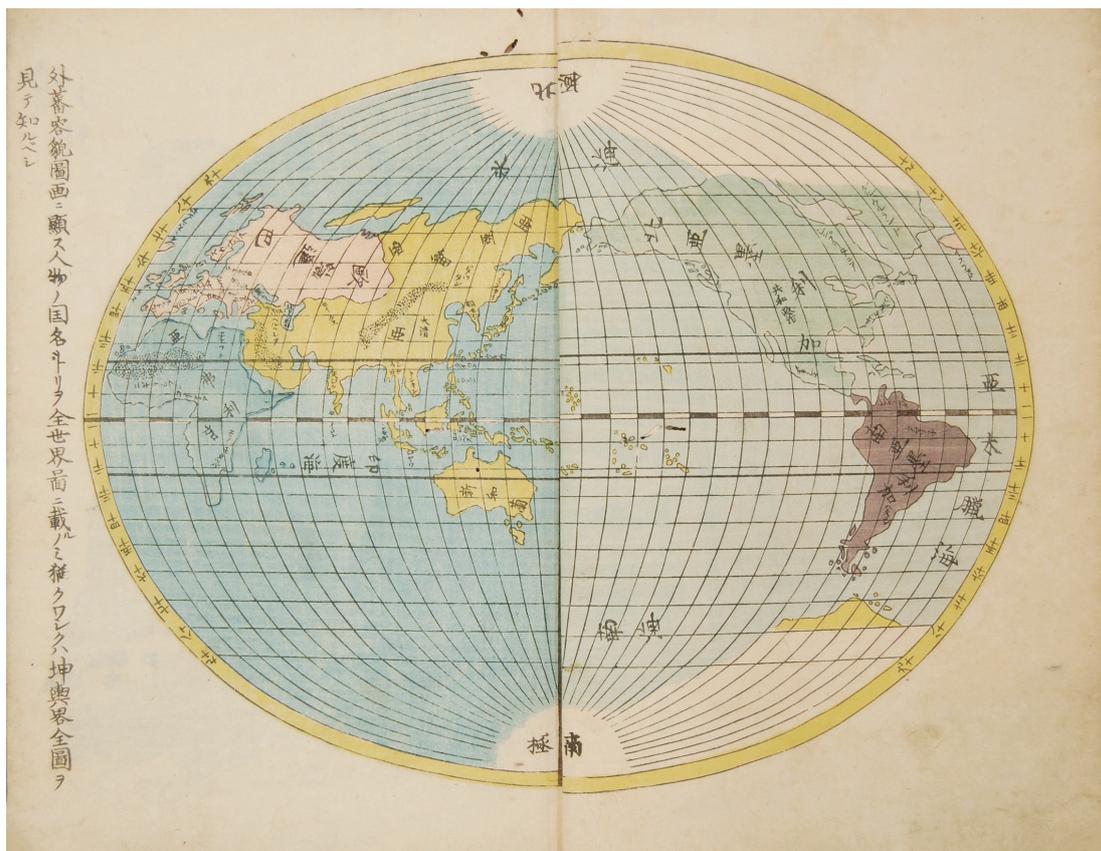
人文社会系長 青木 三郎

# プロローグ 日本近代、グローバルな世界への挑戦

私たちは今年、日本近代の画期として象徴的な明治元(1868)年から150年を迎えた。日本の近代とは、国境を強く意識する国民国家をかたち作りながらも、政治・社会・経済・文化などさまざまな分野においてグローバルな世界に関わり、挑み続けてきた時代と言える。

本学、そしてその前身校は、日本近代における国家の造形と深く関わり、国民を養成するべく研究・教育を充実させるために生み出され、また、拡張・再編を繰り返してきた。その過程で、附属図書館の蔵書も、研究・教育用の資料として収集され、充実されてきた。その中には、近世後期から明治初年に至る昌平坂学問所関係文書や「幕末関係記録」「長州藩士記録」などの歴史的資料、そしてまさに明治という時代を拓いた幾多の名著を含む文学的資料も含まれている。

本特別展では、「グローバルに挑む群像-幕末から明治へ-」と題し、日本近代の始まりとなった幕末・維新时期から明治前半期を中心に、グローバルな世界に挑戦した人々の姿を、未紹介の資料も含め厳選した貴重図書・和装古書の中から見出すことを通じ、日本近代のあり方を考えていくことにしたい。



1 『外蕃容貌図画』

田川春道撰・倉田東岳画 [江戸]：金華堂須原屋佐助 安政2 (1855) 年刊 2巻2冊



亜細亜 大明  
たいみん



亜細亜 大清  
たいしん



亜細亜 朝鮮  
ちようせん



亜細亜 琉球  
りゆうきゆう



欧邏巴 西仏蘭西  
フランス



欧邏巴 和蘭  
オランダ



欧邏巴 英吉利  
イギリス



欧邏巴 露西亞  
ロシア



亜仏利加 厄入多  
エジプト



南亜墨利加 新瓦辣那達  
シンガラナダ



北亜墨利加 合衆国  
ガツシュウコク



北亜墨利加 臥兒狼德  
ガルウルランド

蒸気船で世界中を航海して各地の人種・風俗に通じている欧米の人々と比べると、幕末における日本人の海外知識は貧しいものであった。本書は、<sup>アジア</sup>亜細亜、<sup>ヨーロッパ</sup>欧邏巴、<sup>アフリカ</sup>亜仏利加、南北<sup>アメリカ</sup>亜墨利加の五大州各国の人びとの容貌・衣装、気候、風俗を紹介することにより、彼らをみな「唐人」と呼ぶ日本人を啓蒙するために著され、日米和親条約締結の年に初めて出版された。本資料は初版翌年の刊記を有する。挿図は西川如見が享保5（1720）年に出版した『四十二国人物図説』の系譜を継ぐが、説明文は最も進歩した幕末洋学の所産によると言われている。

（参考文献）開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社（1953）

# I. 条約交渉と昌平坂学問所の儒者

ここでは、幕末の条約交渉に関する資料を紹介していく。特に、これまで未紹介である昌平坂学問所（昌平黌）に残された条約交渉関係の記録に注目していくことにしよう。

昌平坂学問所は、もと林大学頭家の私塾であったが、寛政2（1790）年5月に始まる寛政異学の禁による朱子学の奨励にともなって整備され、同9（1797）年12月に江戸幕府の教学機関として確立された。維新期の慶応4（1868）年6月に新政府に接收され、昌平学校、ついで大学本校と改称されたが、明治3（1870）年7月に当分休校となり、翌4年に閉鎖された。

昌平坂学問所の儒者は漢学・儒学のエキスパートである。それは、鎖国によって海外情報が統制された時代においては、外国を知る識者であることを意味し、幕府の対外交渉においても活躍した。嘉永6（1853）年に林大学頭家11代を継いだ林復斎は、対外関係史料集『通航一覽』を編纂したほか、嘉永7（1854）年に再来したアメリカ合衆国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーと漢文を用いて交渉する応接掛を務め、日米和親条約・下田追加条約（条約附録）の締結に尽力した。また、洋学にも精通する古賀謹堂（謹一郎）は、ロシア使節の応接掛となって日露和親条約締結の立役者の一人となり、老中阿部正弘が推し進めた洋学所、蕃書調所の開設にも貢献した。儒者は、グローバルに挑んだのである。



2 『相模国三浦郡浦賀湊見取略図』  
[江戸時代後期] 1舗

幕命によって1800年代前半に描かれたと見られる浦賀港の絵図。絵図中には、享保5（1720）年に設置され、江戸湾（東京湾）を出入りする船舶・積荷の監視、周辺幕領の民政などを担当した浦賀奉行の屋敷や、異国船の脅威に対応するために文化7（1810）年から文政3（1820）年まで警備を命じられた会津藩の陣屋・台場・見晴台などの施設が描かれる。浦賀がペリー来航以前から海外との接触に備える要地であったことがうかがえる。



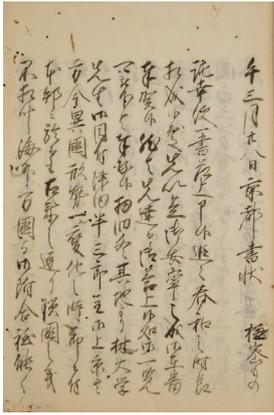
3 『横浜明細図』  
高島鳳堂[図]  
安政6 (1859) 年刊 1舗

横浜は、日米修好通商条約に基づき、安政6 (1859) 年に開港した。本図は、同年に刊行された横浜の絵図である。その構図は、外国人居留地が圧縮されて表現されるなどデフォルメされている。運上所(後の税関)など港湾施設の整備が進められ、また、同年11月に開かれる「遊女屋場所」が描かれるなど、開港後に急激に進む横浜の都市的发展がうかがえる。



4 『横浜案内絵図 時随改正』官許再版  
五葉舎万寿老人(佐野屋富五郎)[編] 横浜：佐野屋富五郎・岸田銀治  
[明治5 (1872) ~ 8 (1875) 年刊] 1舗

横浜在住の地図絵師である五葉舎万寿老人こと佐野屋富五郎が書肆岸田銀治から出版した、地名(ローマ字表記を含む)・地番入りの横浜絵図。左上には根岸村競馬場周辺図、左下に「各国旗記大略之図」(国旗一覧)を付す。明治3 (1870) 年の初版を改訂したもので、大区小区制の開始された明治5年から、英仏両国の駐屯軍が撤退した同8年までの刊行と見られる。『横浜明細図』(資料3)と比べると、都市域の拡大が著しい。



5 『風聞蜜事』  
1冊 幕末関係記録

安政5（1858）年春、老中<sup>ほった</sup>首座堀田<sup>びつちゅうのかみまさよし</sup>備中守正睦は、アメリカ総領事タウンゼント・ハリスとの交渉によって成った日米修好通商条約の調印にかかる勅許を得ようと上洛したが、調印に反対する<sup>いわくら</sup>岩倉<sup>ともみ</sup>具視<sup>こうめい</sup>ら攘夷派の公家の反発にあい、孝明天皇からも拒否されてしまう。本資料は、堀田へ、昌平坂学問所の林大学頭復齋や、<sup>なかやまだよし おおぎ まちさんじょうさねなる</sup>中山忠能・正親町三条実愛ら公家などから差し出された書状類の留書である。前年冬には、幕府の使者として林復齋が<sup>め</sup>目付津田半三郎とともに上京したことが見える。



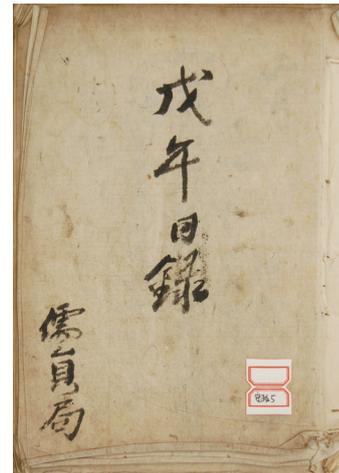
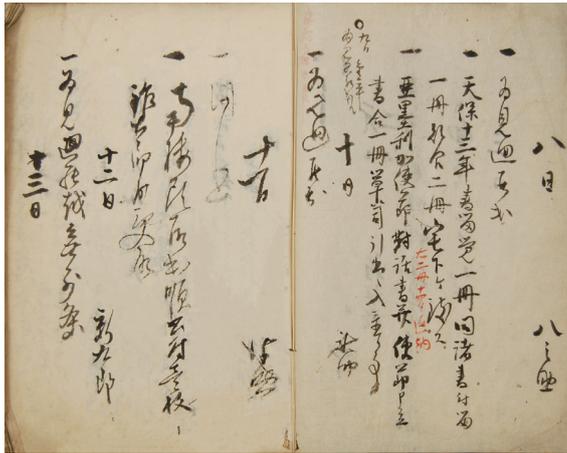
6 『記聞 異国船浦賀江渡来一条』  
1冊 昌平坂学問所関係文書

嘉永～安政年間（1848～60）の異国船への対応にかかる記録を綴る。幕府は嘉永6（1853）年にペリーから開国を迫られると、江戸を防衛するために、伊豆<sup>にらやま</sup>蕪山代官江川<sup>えがわひでたつ</sup>英龍に命じて、品川沖に、石垣で囲まれた正方形や五角形の洋式砲台を8つ建造した。いわゆる御台場であり、本資料には、その設計図である「品川沖台場築立積り書」が綴られている。そのうちの一つである第三台場は現在、台場公園となっている。



7 『阿部伊勢守 (少年読本第41編)』  
熊田葦城著 東京：博文館 明治34 (1901) 年刊 1巻1冊

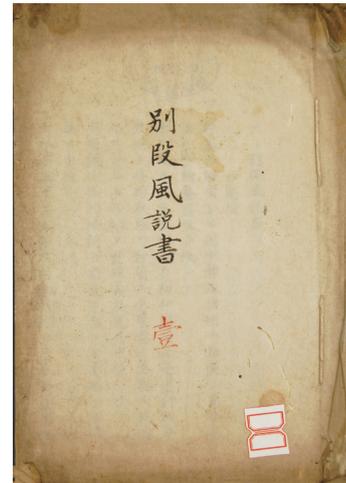
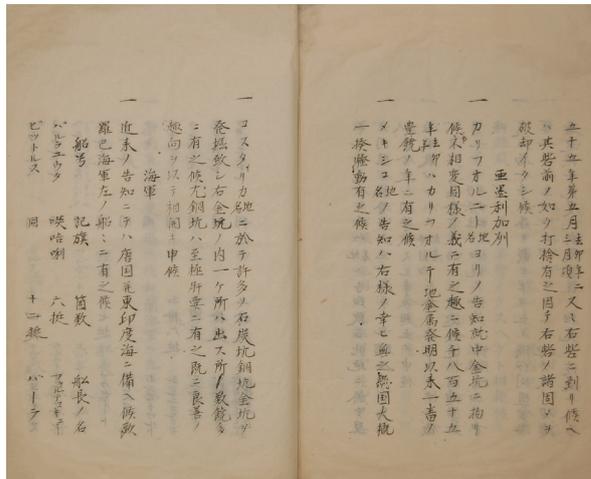
『少年読本』は、少年に「大志」を抱かせることを目的に出版された日本初の伝記児童書シリーズで、複数の著者によって執筆された。出版社は博文館で、全50編が刊行された。<sup>みやきゆういつ</sup>宮木有次氏から東京文理科大学附属図書館に寄贈された宮木文庫は教科書・読本など教育史資料の宝庫であるが、そのなかに『少年読本』全編も含まれている。本編は、ペリー来航時に老中首座であった阿部伊勢守正弘の伝記である。図版は、阿部がペリーと日米和親条約の締結交渉にあたる場面を描く。



つねらまにちろく  
8 『戊午日録』

儒員局[著] 安政5 (1858) 年 1冊 昌平坂学問所関係文書

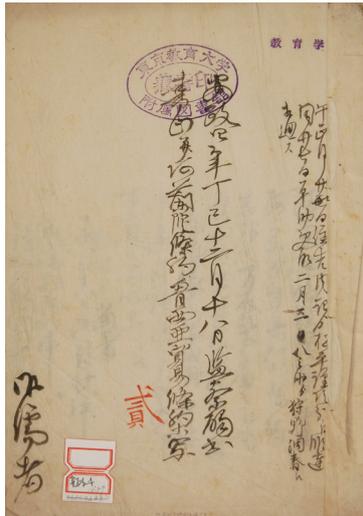
昌平坂学問所関係文書は、昭和20年代前半に東京文理科大学教育学教室の講師石川謙、東京高等師範学校教授唐澤富太郎が東京神田の一誠堂から購入した文書群で、寛政12 (1800) ~ 文久2 (1862) 年の学問所日記48点を含む全315点から成る。本資料は学問所日記の1冊で、その正月8日条には、「亜墨利加使節対話書并使節申立書合一冊、筆筒引出へ入置候事」とあり、日米間の通商にかかる条約交渉の記録が大切に管理されていたことが記される。昌平坂学問所関係文書には、『亜墨利加使節対話書』を含め、表紙に「壹・貳・參」と冊番号が朱書きされた条約交渉記録が現存する (資料9・10・11)。



べつだんふうせつがき  
9 『別段風説書』

佐藤新九郎 (立軒) [写] 安政3 (1856) 年写 1冊 昌平坂学問所関係文書

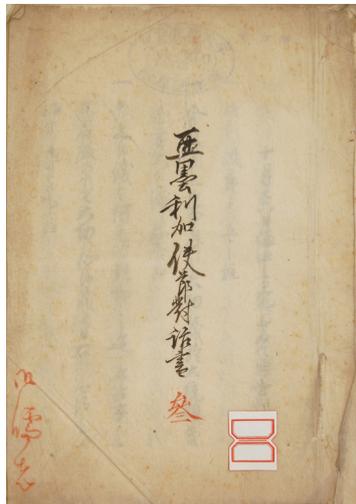
安政3年11月に幕府目付から回覧された別段風説書 (1856年) の謄写本。謄写したのは昌平坂学問所の儒者であり、佐藤一斎の第3子である立軒で、通称を新九郎、名を梶、字を亦光という。別段風説書は天保11 (1840) 年以降、オランダ領東インド政庁によってまとめられた海外情報で、日本長崎の臨時商館長から幕府に毎年提出された文書。日本では長崎のオランダ通詞や、江戸の天文方蕃書和解御用 (安政元 <1854> 年より洋学所、同3年より蕃書調所) によって和訳されたが、機密書類とされ、一般へは流布しなかった。本資料は江戸訳の写本と見られる。アメリカ・カリフォルニアのゴールドラッシュも報告されている。全文の紹介には、町奉行書類の写本 (長崎訳) を底本とする『大日本古文書』幕末外国関係文書之十四、オランダ国立中央文書館に残る商館文書 (蘭文) から全訳した松方冬子編『別段風説書が語る19世紀』がある。



10 『安政四年丁巳十二月十八日監察触出書面并阿蘭陀条約・魯西亜貿易条約等写』

御儒者[写] [安政5(1858)年写] 1冊 昌平坂学問所関係文書

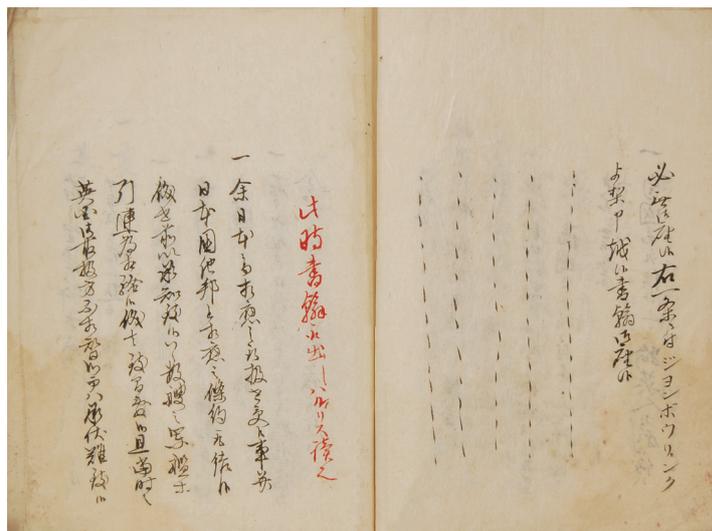
幕府目付から儒者や御用絵師に回覧された、日本とオランダとの間で結ばれた和親条約および条約追加・遊歩規定書、ロシアとの間で結ばれた日露条約追加（以上、いずれも和訳）などの写本。これらの条約の交渉では、オランダのみならずロシアとの交渉においてもオランダ語が用いられ、条文は和訳・漢訳されたと言い、江戸時代初頭以来のオランダとの通商が基盤となったことがうかがえる。



11 『亜墨利加使節対話書』

御儒者[写] 1冊(後欠) 昌平坂学問所関係文書

タウンゼント・ハリスは、日本初のアメリカ総領事として安政3(1856)年7月21日に伊豆下田(静岡県)へ赴任し、日米修好通商条約の締結を押し進めた。翌4年10月21日に江戸登城が許され、將軍徳川家定に謁見して合衆国大統領からの国書を手渡した。本資料は、10月26日に老中阿部正睦とその屋敷で、また、11月6日に旗本土岐頼旨・川路聖謨・鶴殿長鋭・井上清直・永井尚志と、逗留中の蕃書調所で「対話」(交渉)した、そのやりとりの議事録である。蕃書調所頭取の古賀謹堂は昌平坂学問所の儒者出身であった。



12 『亜墨利加使節対話書』

御儒者[写] 1冊(断簡) 昌平坂学問所関係文書

本資料は断簡であるが、記述方法、保管の原態をふまえると、『亜墨利加使節対話書』(資料11)から外れた一部とみられる。ここでの「対話」の話題に、英仏と清との間で発生したアロー号事件が見え、「ハリス」(ハリス)が事件の処置に当たっている清国駐在英國全権使節兼香港総督の「ジョンボウリンク」(ジョン・ボーリング)の書簡を取り出し、読み上げたことが記録されている。ハリスは、アロー号事件に顕著な英仏列強の脅威を示し、日本側に決断を迫ったのである。

## 【コラム】 出版された五ヶ国条約と穂積陳重

日米修好通商条約は、貿易章程とともに安政5（1858）年6月19日に締結された。これによって、日米和親条約で定められた下田（静岡県）・箱館（函館、北海道）のほか、期限付きで神奈川（横浜、神奈川県）・長崎（長崎県）・新潟（新潟県）・兵庫（神戸、兵庫県）が開港され、江戸（東京都）・大坂（大阪府）の開市、関税や領事裁判権などが取り決められた。その後、オランダ（7月10日）、ロシア（7月11日）、イギリス（7月18日）、フランス（9月3日）とも同様の条約が結ばれ、これらは安政の五ヶ国条約と通称されている。

この安政の五ヶ国条約は、翌6（1859）年6月に江戸の書肆（書店）から『五ヶ国条約書并税則』5巻5冊として出版された。

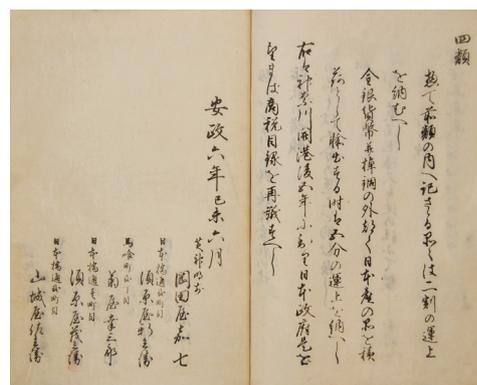
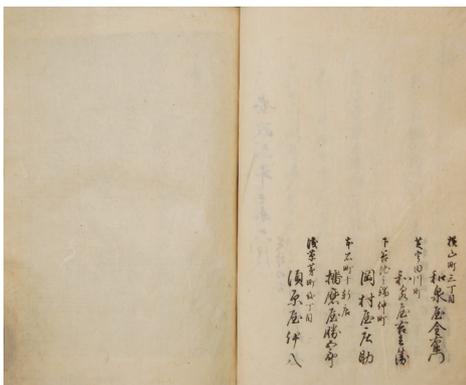
筑波大学附属図書館には、複数の『五ヶ国条約書并税則』が所蔵されているが、その中には穂積文庫に収められるものがあり、その蔵書印である「法斉穂積蔵書」の印記がある。



印記

穂積文庫は、法学者で日本における近代法立法にも深く関わった穂積陳重（東京帝国大学名誉教授）と、その長男重遠（元東京大学法学部長・最高裁判所判事）の旧蔵書4,023点から成る。穂積家は、伊予宇和島藩（愛媛県）伊達家の重臣で、国学者の家系であったが、明治維新以降は多くの法学者を輩出した。なお、日本家族法の父と言われる重遠は本学前身校の高等師範学校附属小学校・同中学校の卒業生であり、その長男重行は近代イギリス史を専攻し、東京教育大学文学部教授・大東文化大学学長を歴任した。

本学の穂積文庫は、昭和27（1952）年～28（1953）年ごろに穂積家から学界へ提供された穂積家関係資料の一部で、東京教育大学文学部教授であった憲法学者稲田正次によって昭和27年に科学研究費で購入された。安政の五ヶ国条約は、近代を知り、現代を生き、未来へと歩むために、歴史学研究のみならず法学研究においても重要な資料とされてきたのである。



13 『あめりかこくじょうやくかくぜいそく 阿墨利加国条約并税則・おらんだこくじょうやくかくぜいそく 阿蘭陀国条約并税則・いぎりすこくじょうやくかくぜいそく 英吉利国条約并税則・ふらんすこくじょうやくかくぜいそく 仏蘭西国条約并税則・ろしあこくじょうやくかくぜいそく 露西亜国条約并税則』  
『五ヶ国条約書并税則』

[江戸] 須原屋伊八ほか 安政6(1859)年刊  
5巻5冊

## II. 動乱を生きた人びと

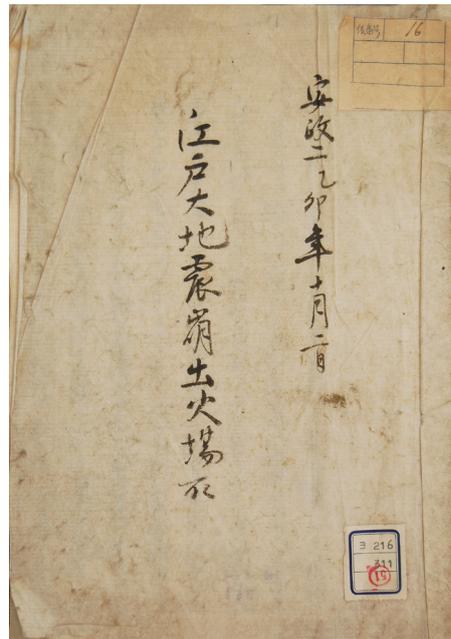
「泰平の眠りを覚ます上喜撰 たつた四杯で夜も眠れず」

この狂歌が示すように、浦賀沖でのアメリカ合衆国ペリー艦隊の蒸気船4隻の出現、そして開国は、200年以上続いた日本列島の平和を一変させ、動乱の時代の幕開けをも告げるものとなった。

グローバルに臨んだその時、これを拒むがごとく尊王攘夷が叫ばれ、その論調は政治的動向にも大いに影響を与えた。将軍・幕府の権威が揺らぎ、開国か、攘夷か、武家・公家のみならず民衆に至るまで、さまざまな主義主張が飛び交い、また、情報が交換され、身分制を超えて行動し実践する人びとが幕末・維新期の歴史を築いていった。その最中には、筑波においても、水戸藩を脱藩し、天狗党と呼ばれた青年たちの歩みが刻みつけられた。そして攘夷を非現実なものとして認識した時、論調は尊王倒幕へと傾斜し、明治という時代が拓かれていくのである。

ここでは、これら動乱の時代を生きた群像を歴史的な事件に注目しながら見ていく。特に明治維新の評価に研究上の関心が向けられていた昭和28（1953）年、東京教育大学日本史教室によって研究・教育用資料として購入された「幕末関係記録」「長州藩士記録」を中心に取り上げることにする。

### 安政江戸地震



#### 14 『江戸大地震崩出火場所』

安政2(1855)年 1冊 幕末関係記録

安政2（1855）年10月2日午後10時ごろに発生した安政江戸地震は、南関東における直下型の地震と考えられている。本資料はその際の江戸での被害を書き留めた記録である。江戸で被災した町は3,012か町に及び、32か所から出火したという。その結果、一説に「即死・怪我人」が10万人ほど出たとも記録されている。地震後の10月7日には知行1万石以下の旗本に拝借金、また御家人に御救金が出されたこと、同月14日には商人が材木などの値段を引き上げることを禁じたことなど、幕府の災害対応も書き残している。

## 15 『生捕ました三度の大地震(鯨絵)』

[安政2(1855)年]刊 1枚



安政江戸地震の際には、鯨絵と呼ばれる多色刷りの錦絵が数多く出版された。鯨は、地下で活動することにより地震を起こす存在と考える民間信仰が存在した。鯨絵は、このような民間信仰に基づき、鯨を主人公とし、地震の発生時やその後の社会を風刺した絵画である。本資料は、弘化4(1847)年の善光寺地震、嘉永6(1853)年の小田原地震、そして安政江戸地震を引き起こした3匹の鯨が鹿島大明神によって生捕りにされて江戸屋(蒲焼き屋)に連行されたが、地震時に稼ぐ大工・鳶職・左官・屋根屋・露天商から助命嘆願される様子を滑稽に描く。

## 16 『鹿島恐(鯨絵)』

[安政2(1855)年]刊 1枚



茨城県鹿島市・鹿島神宮の祭神である武甕槌大神は、要石によって大鯨を封じ込めるとい民間信仰がある。本資料は、鹿島神宮の神職の格好をした鯨の周りで、地震後の建築でもうけている大工・土方や、死者をつかさどる「閻魔の子」が踊りほうけている様子を描く。詞書には「世直しの地震ハいつこの跡もなくよき事ふれのかしましきかな」とあり、踊る彼らにとっては地震が「世直し」となっていると風刺する。

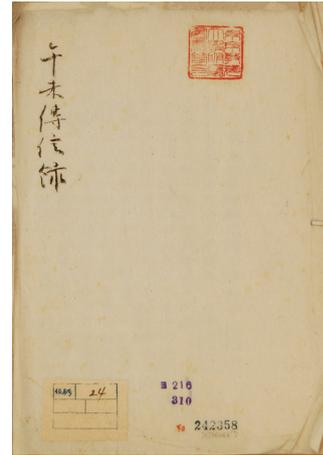
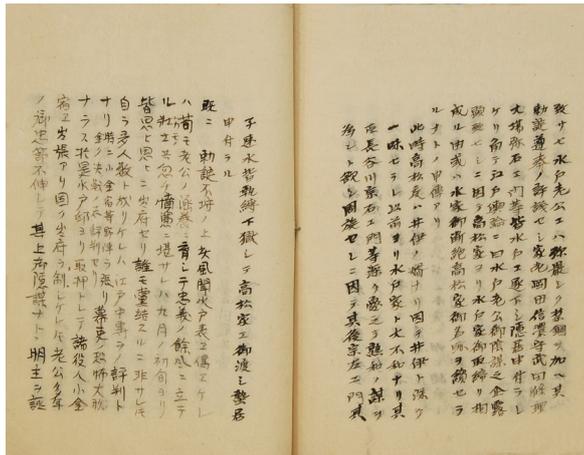
## 17 『世直し鯨の情(鯨絵)』

[安政2(1855)年]刊 1枚



本資料は、地震によって倒壊した家屋から、擬人化された鯨が被災者を救助している様子を描き、地震を起こしたはずの鯨は「世直し」を行う存在で、情け深いというのである。このような鯨絵が当時の人々に受け入れられた理由について、C.アウエハントは、鯨絵の狙いの一つに、嘲笑、下品な冗談、泣き笑いを絵の中に折り込み、都市に住む民衆の生活に潤いを与えることがあったためと論じている。悲しく辛い地震後の人々の心情を考えさせられる絵画である。

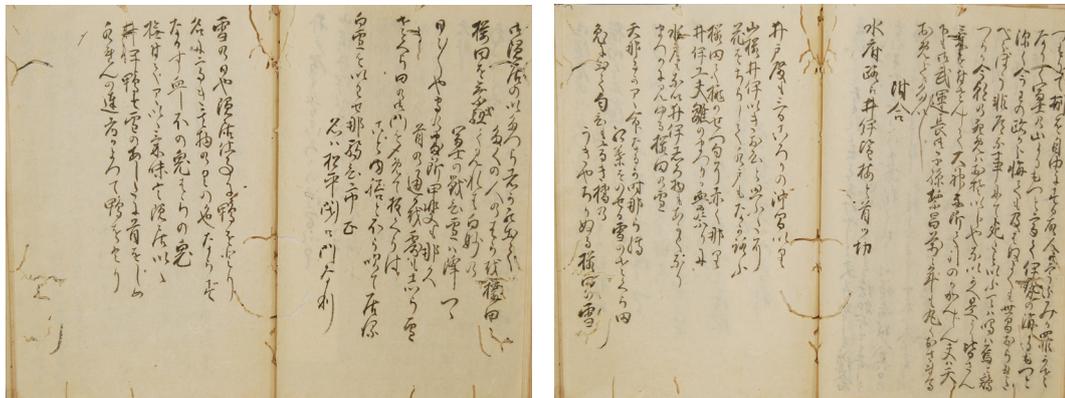
# 安政の大獄



## 18 『午未伝信録』 1冊 長州藩士記録

安政5（1858）年・6（1859）年の2か年にわたる安政の大獄について記す長州藩士の記録。幕府の大老井伊直弼や老中間部詮勝は、将軍継嗣や条約勅許の問題での反対者を弾圧した。水戸藩に対しては特に厳しく処断されたことが知られているが、「水戸老公」、すなわち水戸藩の前藩主徳川斉昭が禁錮とされたこと、「水家御断絶」（水戸徳川家の取りつぶし）の「申伝」（噂）があることなども記されている。また巻末には、安政の大獄で処刑された吉田寅二郎（寅次郎、松陰）の辞世の句として「タトへ身ハ武蔵ノ野辺ニ朽ル共留メ置マシ大和魂」と記されている。

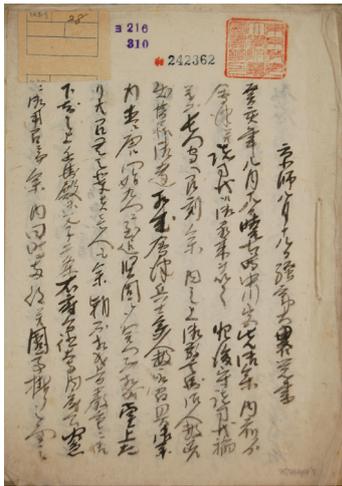
# 桜田門外の変



## 19 『文久記』 巻3 1冊 幕末関係記録

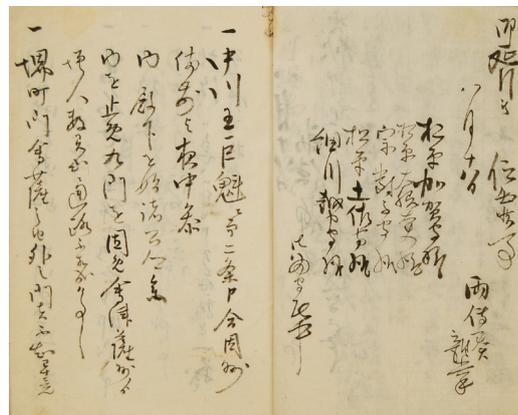
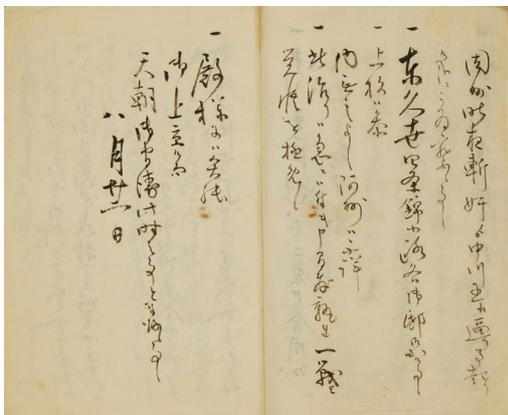
文久年間（1861～64）に発生した事件を書き留める記録の1冊である。中には、水戸藩の脱藩者17名と薩摩藩士1名が安政7（1860）年3月3日に江戸城桜田門外（東京都千代田区）で大老井伊直弼を暗殺した桜田門外の変についても記録される。「水府路え井伊塩梅と首ッ切」「山桜井伊いきおひと思ふたに花をちらして水戸もなかるふ」「井伊工夫雛のまつりか血祭りに」など、当時の江戸庶民が風刺した狂歌・川柳も記されている。

八月十八日の政変



20 『京師八月十八日騒動大略覚書』  
[文久3(1863)年] 1冊 長州藩士記録

文久3(1863)年8月18日の政変を記録する長州藩士の記録。穏健な攘夷派である孝明天皇なかがわのみやあさひこしんのう、中川宮朝彦親王、京都を守護する会津藩、薩英戦争を経て開国派が主流となった薩摩藩が中心となり、攘夷を画策する三条実美ら一部公家および長州藩を京都から追放した事件である。比較的事実が客観的に記録されており、『權説』(資料21)とは執筆の姿勢が異なっている。



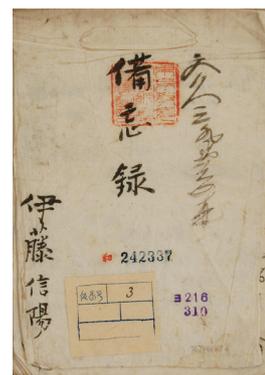
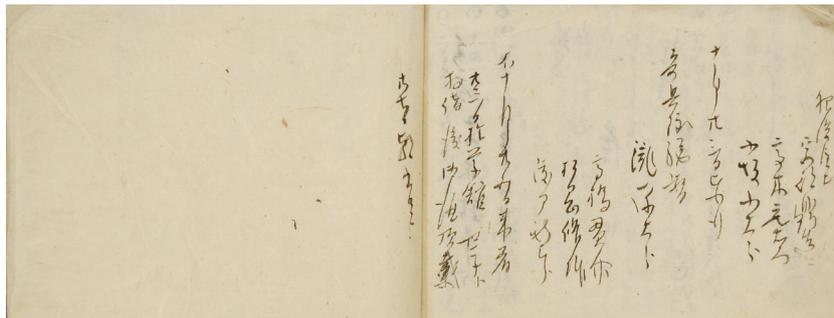
21 『權説』  
[文久3(1863)年] 1冊 長州藩士記録

文久3(1863)年8月18日の政変を記録する長州藩士の記録。「中川王巨魁」(中川宮朝彦親王は悪の頭目)と記されるなど、長州藩側の視点から叙述されている。中川宮は、右大臣二条斉敬にじょうなりゆきと申し合わせて夜中に御所へ参内し、関白鷹司輔照たかつかさすけひろをはじめ諸公卿の参内を止め、御所の9門を会津藩・薩摩藩に封鎖させた。これを受け、長州藩側は「一戦」する覚悟を決めた。



22 『三条実美公(少年読本第4編)』  
依田学海著 東京：博文館 明治31(1898)年刊 1編1冊

8月18日の政変で失脚し追放された三条実美・三条西季知・四条隆調・東久世通禧・壬生基修・錦小路頼徳・澤宣嘉は、長州へ落ち延びることになった。いわゆる七卿落ちである。漢学者・演劇評論家・劇作家として著名な依田学海が著した少年読本の『三条実美』には、蓑笠に身を隠した七卿落ちの様子が描かれている。

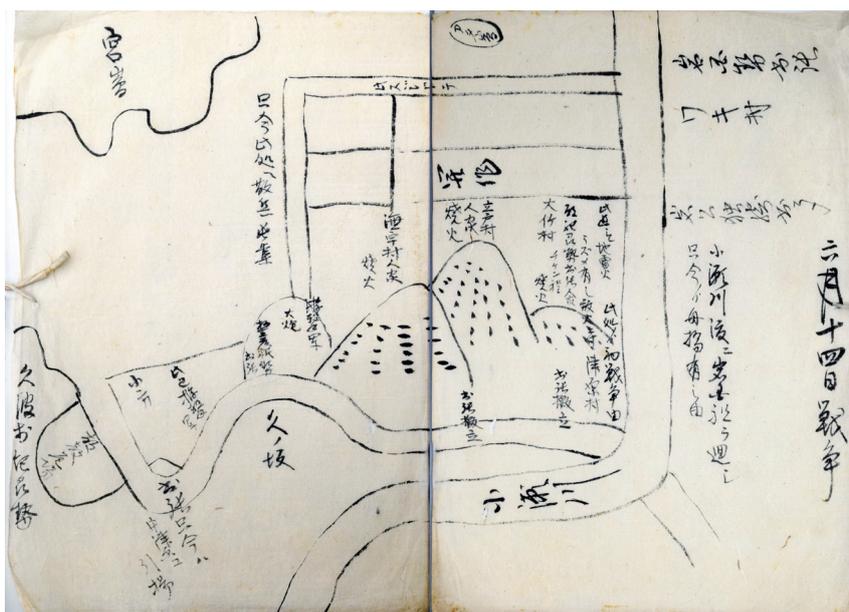


### 23 『備忘録』

伊藤信陽著 文久3(1863)年 1冊 長州藩士記録

長州藩士と見られる伊藤信陽が記した日記の一冊。中には文久3(1863)年6月に結成された奇兵隊が上京した記事が見える。長州藩内ではこの奇兵隊をはじめとする諸隊が100以上、農工商から被差別民に至るさまざまな身分の者によって組織され、慶応元(1865)年には正規軍とされた。本資料には、総督として滝弥太郎厚徳の名前が記されている。滝は、吉田松陰に師事し、奇兵隊の創設者である高杉晋作の跡を継いで総督の一人となった。

## 第二次長州征伐



### 24 『覚』

[慶応2(1866)年] 1冊 長州藩士記録

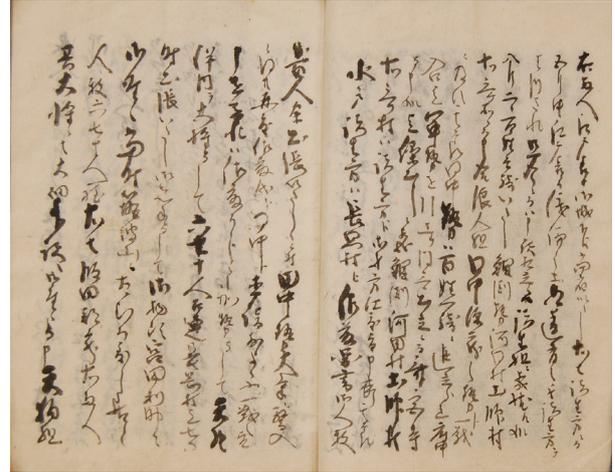
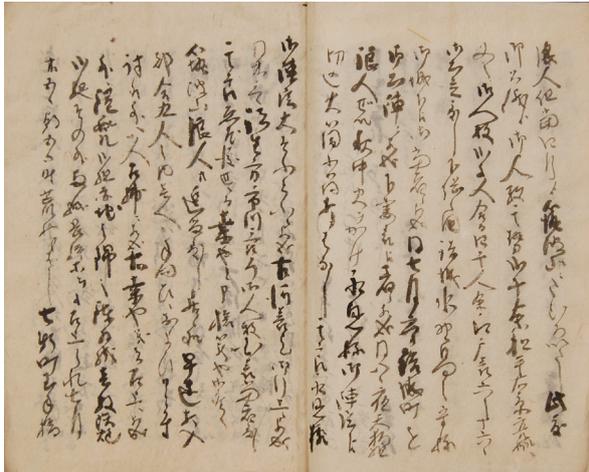
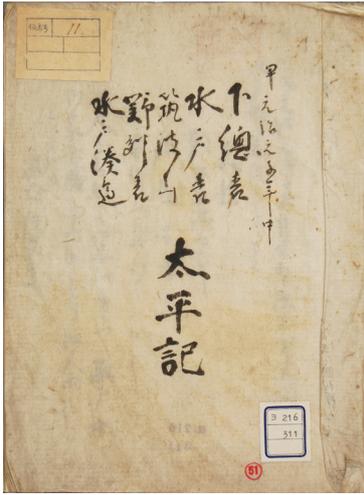
長州藩は、幕末に2度、幕府から征討を受ける。本資料は慶応元(1865)年に始まる第二次長州征討の覚書などが収められる。中には、翌2年6月14日、小瀬川の戦いの図もある。小瀬川は周防国(山口県)と安芸国(広島県)の境界で、長州藩とその支藩岩国藩は幕府方3万の軍勢と衝突した。図中には岩国藩の陣地ワキ村(和木村)、紀州藩(和歌山県)の陣地久波(玖波)村、高田藩(新潟県)の陣地久ノ坂(苦の坂)や景勝地宮島も見える。また、吉田松陰門下で、長州藩の砲隊を率いていた小野為八正朝が長崎で学んだ洋式の武器と言われる「地雷火」が使用されたこともわかる。

天狗党の乱

25『<sup>しもうきおとて</sup>下総表・<sup>みとおとて</sup>水戸表・<sup>つくばさん</sup>筑波山・<sup>やしゅうおとて</sup>野州表・<sup>みとみなへん</sup>水戸湊辺  
太平記』

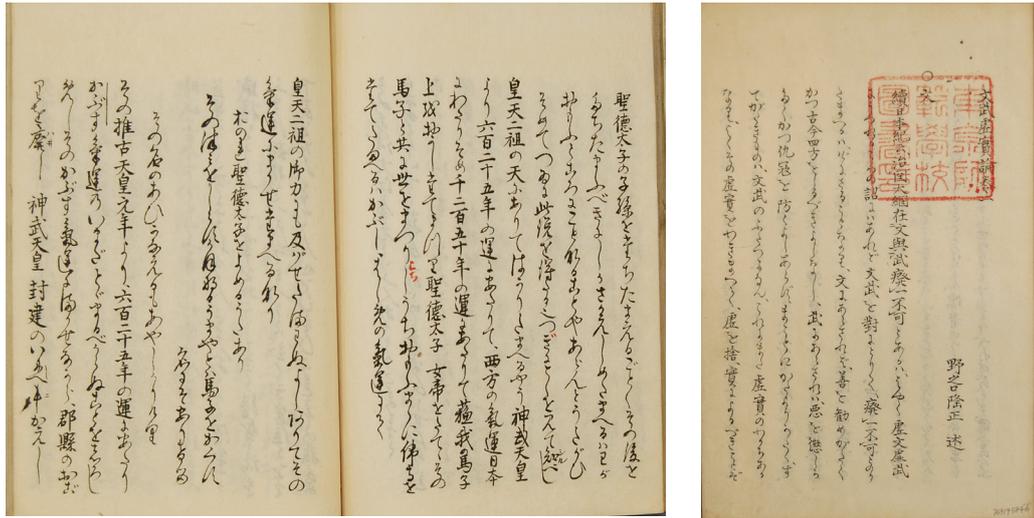
元治元(1864)年 1冊 幕末関係記録

元治元(1864)年3月27日に水戸藩の尊攘激派が筑波山で挙兵した事件の記録。天狗とは藩主徳川斉昭のもとでの改革派の呼称であり、これと対抗した保守派の門閥層は諸生と呼ばれていた。前年の8月18日の政変で尊皇攘夷運動が挫折すると、藤田小四郎ら天狗が幕府に攘夷の実行を促すために筑波山で挙兵した。しかし、幕府から追討されて敗走し、將軍継嗣と目される一橋徳川慶喜を頼ろうとしたが、上洛の途中で加賀金沢藩に降伏し、全員が処刑された。



(前略) 天狗組浪人、但、当四月より筑波山二たむろいたし、此度 御公儀より御人数其勢二千余、松平右京亮様又候御人数式千人、合而四千人余、江戸表六月十六日御出立致し、下総之国結城水野日向之守様御城下え御当着二相成、同七月六日、結城町を御出陣二相成、下妻表え着二相成、同八日夜、天狗組浪人ぜい夜中火ヲかけ、永見様御陣屋え切込、大筒・小筒打はなし、其節、永見様御陣屋大そふとふ二相成、古河表迄御引上二相成、同廿三日、諸生方市川三左衛門御人数、国表当着致候、其節、宿屋渡世二而桑やと申旅籠や御座候、筑波山浪人共逗留致し居候処、早速打入、都合九人之内壱人ハ手向ひ二およひ申候二付討取、外八人召捕二相成、右桑や義は召上二相成、外鎧兜式組、赤地之錦之陣羽織壹枚、鉄炮式挺、その外羽織・長袴等ヲも召上られ、(後略)

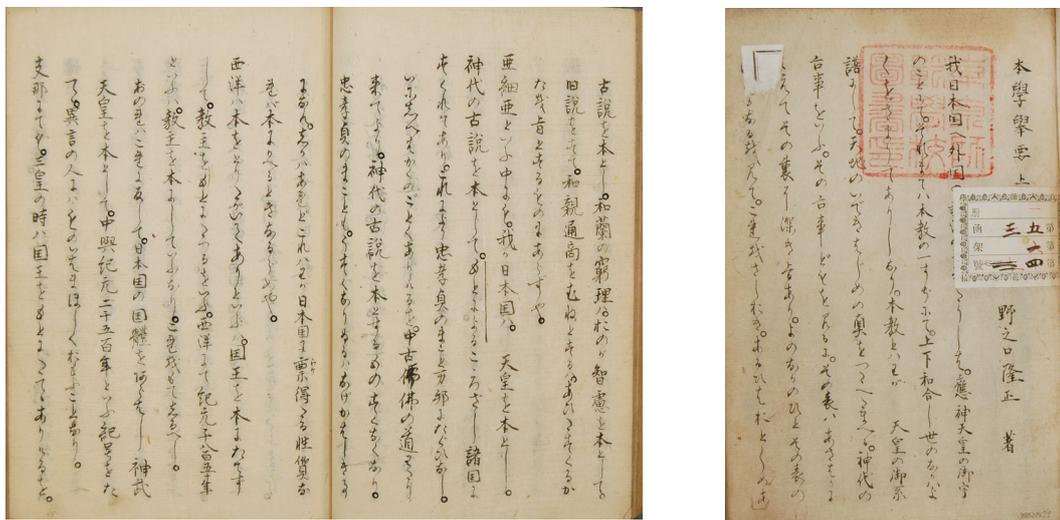
# 幕末国学の展開



## 26 『文武虚実論』

野之口(大国)隆正著 [嘉永7(1854)年] 6巻6冊

大国隆正は、幕末・維新时期に活躍した、平田篤胤門下の国学者・神道家。野之口姓であったが、文久2(1862)年に大国と改めた。本書は、嘉永6(1853)年のペリー来航後に海防を論じたもの。儒者らの説く海防論に反論し、海防の要は虚文虚武を斥けて実文実武を努めることにありと論じ、和魂を鞏固にし、以って我が国を宇内に冠絶させるべきであると、独自の尊王攘夷論を展開した。土地制度を「神武天皇封建のいにしへにかえし」と述べるなど、神武復古の思想も述べられている。

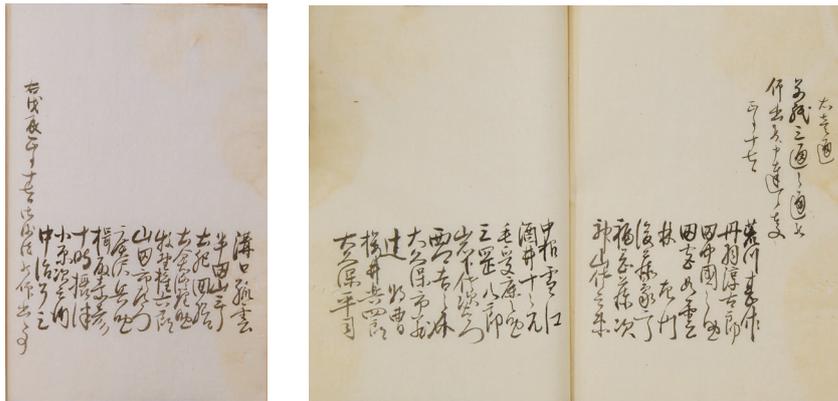
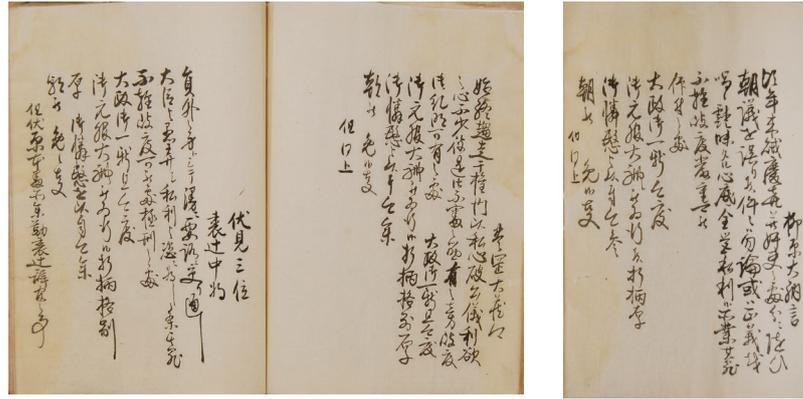


## 27 『本学挙要』

野之口(大国)隆正著 安政2(1855)年 2巻1冊

「本学」とは『古事記』の序にある「本教」の旨を学び知る學術の意で、大国隆正の造語。本書は、皇位が万国に君臨する理のあるものと説き、国威を四方に宣布する書物である。「国体」について、「<sup>アジア</sup>亜細亜といふ中にも、我が日本国ハ、天皇を本とし、神代の古説を本として、もとによるこゝろざし諸国にすぐれてあり、これにより忠・孝・貞のまこと、万邦にたぐひなし」と論じている。

大政奉還から戊辰戦争へ



28 『御用留』

〔慶応3 (1867) 年〕 1冊 長州藩士記録

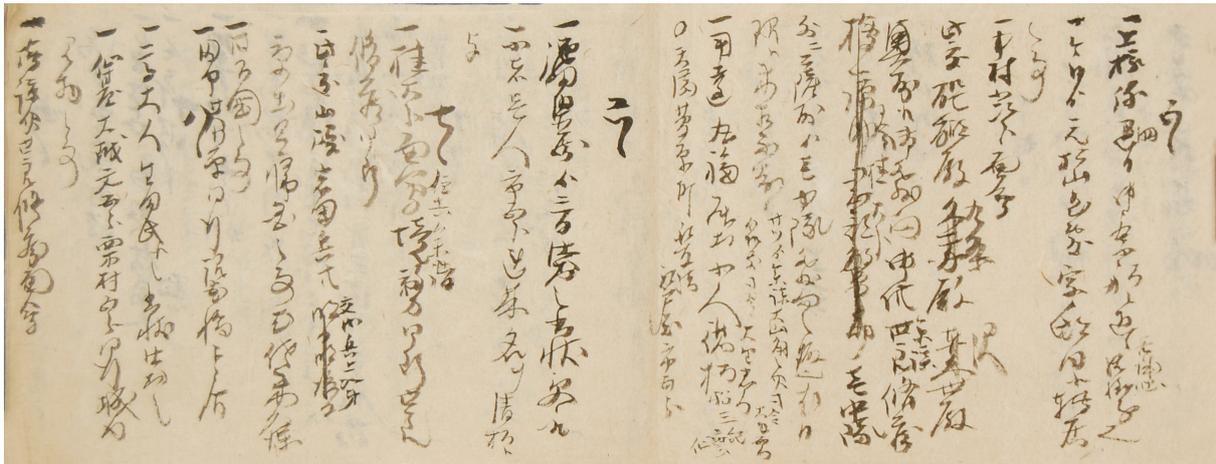
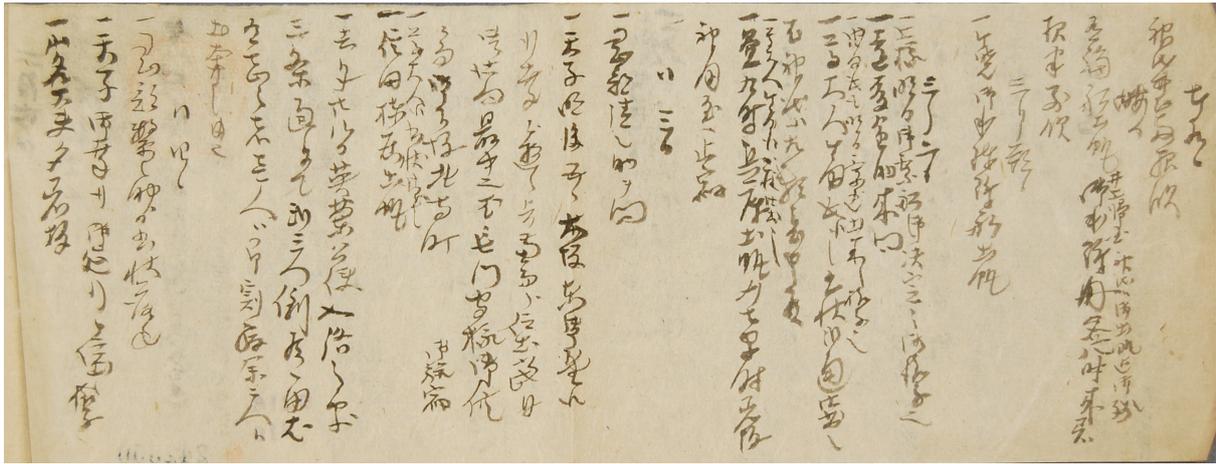
攘夷の挫折は倒幕運動へと展開し、対立していた薩摩藩と長州藩の同盟に発展する。そして慶応3 (1867) 年10月14日に將軍徳川慶喜が大政奉還を行い、12月9日の王政復古の発令によって幕府政治は終焉を迎える。本資料は、その慶応3年から翌年にかけての御用留。慶応4 (1868) 年正月17日の通達には、土佐藩出身の後藤象二郎、薩摩藩出身の西郷隆盛・大久保市蔵、長州藩出身の榎本武揚などの名前が見える。



29 『西郷隆盛 (少年読本第18編)』

川崎三郎著 東京：博文館 明治32 (1899) 年刊 1編1冊

西郷隆盛の伝記。著者の川崎三郎 (紫山) は明治～昭和前期のジャーナリスト。水戸藩士の子で、17歳で上京し、東京の曙新聞社、大阪の大東日報社の記者を経て明治24 (1891) 年に『経世新報』を創刊、同34 (1901) 年に『中央新聞』、38 (1905) 年に『信濃毎日新聞』の主筆となる。明治34年には頭山満らと黒竜会を創設し、また、日中戦争期には大東亜協会を組織した。『西郷南洲翁』『南洲翁逸話』(明治27<1894>年)、『西郷南洲』(明治30<1897>年)、『大西郷と大陸政策』(昭和17<1942>年)などの著書もある。



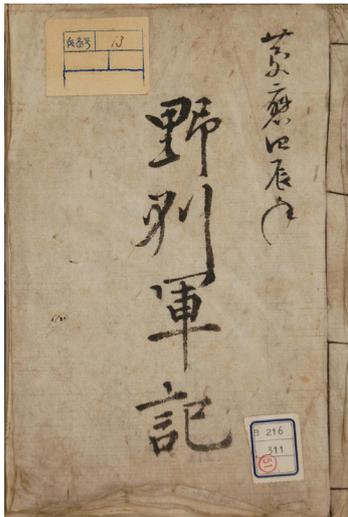
30 『日記』  
 [慶応4 (1868) 年] 1冊 長州藩士記録

長州藩士の日記で、明治天皇の大坂行幸についても記されている。この行幸は新政府の副総裁となった三条実美ら1,655人を伴い、慶応4年3月21日に京都を出発、翌々23日に行在所とされた大坂の本願寺津村別院に到着した。天皇は天保山で軍艦を観覧するなどして40日余り滞在し、同年閏4月8日に京都へ還幸した。この日記によれば、はじめ3月5日出発と計画され、「若殿様」とも記される「長門守様」(毛利元徳)もお供することになり、大坂の北寺町を旅宿としたことが記されている。



31 『坂本龍馬 (少年讀本第19編)』  
 坂崎紫瀾著 東京：博文館 明治33 (1900) 年刊 1編1冊

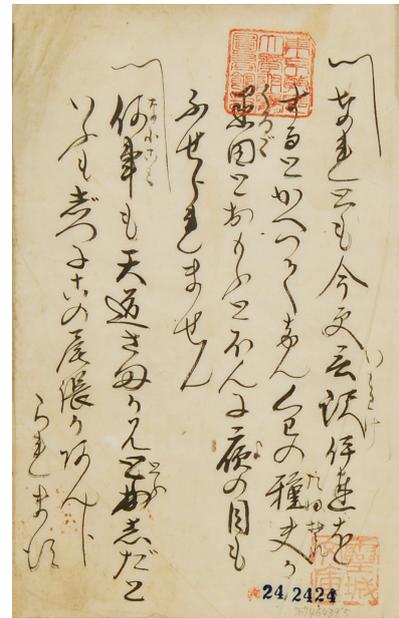
著者の坂崎紫瀾(斌)は明治期の新聞記者・小説家。龍馬と同じ土佐藩出身で、明治7 (1874) 年の板垣退助による愛国公党の設立にも参画した。同年に松本裁判所判事となるが、征韓論を主張して辞職、後には『松本新聞』主筆・『高知新聞』編集長などを歴任して自由民権を唱えた。著作には、龍馬を主人公とする政治小説『汗血千里の駒』(明治16 <1883> 年) や、『維新土佐勤王史』(大正元 <1912> 年) などがある。



32 『野州軍記』

慶応4(1868)年 1冊 幕末関係記録

前将軍徳川慶喜は新政府から排除され、また、挑発に乗ったことから、戊辰戦争が開始された。本資料は、野州、すなわち下野国(栃木県)を舞台に展開した戊辰戦争の様子を記録する。下野国は、奥羽列藩同盟を結ぶ東北諸藩と新政府側とが対峙する境界地域でもあり、各勢力が掲げた軍旗も絵入りで記録されている。また、当時の狂歌・川柳・都々逸・数え歌など庶民が風刺した文芸も記録しており、興味深い。



会津の名義は日本  
 徳川の味方はわづか  
 御譜代衆も追々降  
 彦根・尾州ハ畜生武  
 勅使式人に多くの警  
 義心の御方は当時御無  
 早追駕籠ハ方ひち  
 駕籠中二顔をしかめて眉二  
 大坂の御開は無念のご  
 所々の新関は誠に厳  
 京都の御沙汰ハ嘘ハ  
 会津の武士は一騎当  
 御恭順を破りてハ数  
 薩摩も会津二は壹もく  
 目さず敵はまつ薩

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万 億 兆

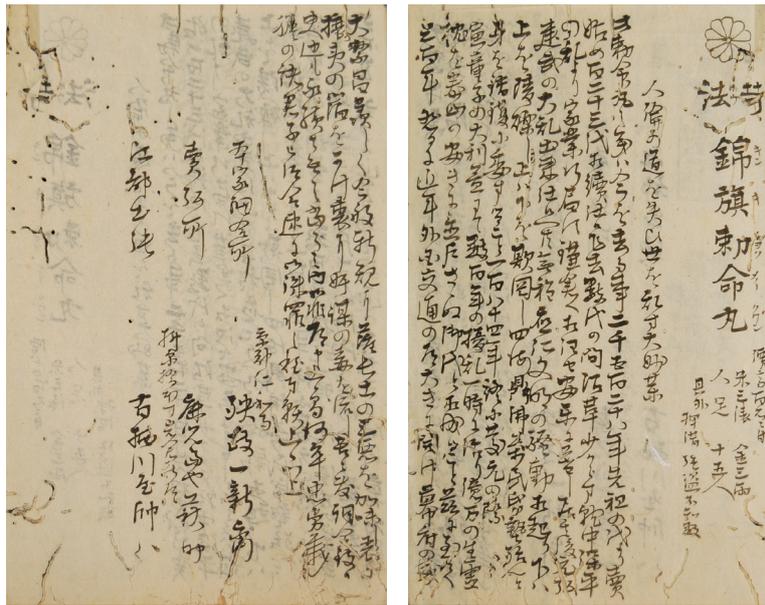
なれども今更言訳伊達を  
 するとかへつてけんくわの種夫か  
 黒田とおもふとほんに  
 夜の目もふせられません  
 何事も天道さまか見とふしだと  
 いふもじつにこの尾張かあんじられます  
 夫にかんじんの先へたつて世話を  
 やく紀のさんも先おとし長さんと  
 けんくわの物入ふた一の代になつて  
 内々の事で高見て見物されても  
 仕方かなし  
 た言訳の立ぬハ上方御本店様



### 33『戊辰記』

#### 1冊 幕末関係記録

本資料は、「文久記」（資料19）と一連の記録であり、戊辰、すなわち明治元年前後の出来事や文書を記録する。庶民による風刺も記録されているが、その一つが「錦旗勅命丸」である。これは、下野国上高根沢村西郷（栃木県高根沢町）の豪農宇津権右衛門家が売り出す小児薬である「金匱救命丸（宇津救命丸）」のチラシを基に、官軍の錦の御旗、勅命を皮肉って作成されている。



苛 価高百石二付  
米三俵・金三兩・  
人足十五人  
其外 押借・強盗不知数

法 錦旗勅命丸

人倫の道を失ひ世を乱す妙薬

此勅命丸之義ハ、今を去る事二千五百二十八年先祖の代より売始め、百二十三代相続仕候、乍去、数代の間、沿革少からず、

就中、保・平

の乱より家業行届す、鎌倉へ相任せ、安楽に暮し居、其後、元弘・建武の大乱出来仕候へ共、無程応仁・文明の騒動相起り、下ハ

上を凌燦し、上ハ下を欺罔し、四海鼎沸、万民昏墊、殆んと身を鎧鑊に委すること一百八十四年、終に慶・元の際

寅童子の大利益にて、数百年の擾乱一時に治り、億万の生靈枕を泰山の安きに置、戸さゝぬ御代と相成候こと、茲に至て

三百年、然るに近年外国交通の道大きに開け、幕府の盛大繁昌羨しく、今般新規に薩・長・土の三悪を加味し、表に

攘夷の箔をかけ、裏に奸謀の毒を流し、苦々敷調合致候ゆへ、迪も永続は無之、当分之内御非道申上候間、何卒忠勇義

肝の諸君子被 仰合、速に御誅罰之程奉願上候、以上  
京都仁和寺

本家調合所 殃政一新斎

壳弘所 鹿兒島や萩助

江都出張 柳原橋本町岩倉新道 有栖川屋帥八

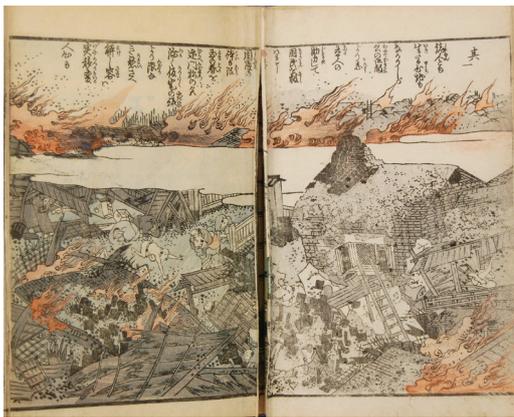
## III. 明治を拓いた名著

往々にして日本の歴史は緩慢な変化の相を見せつつ推移してゆくのだが、明治前半期のドラスティックな変化には目を奪われるものがある。国家、国民、国語、軍隊、恋愛などそれまで存在しなかった基本的概念が一気になだれ込み、きわめて短い時間で浸透してゆく。どうしてこのようなことが可能であったのか。もちろん歴史学の成果はそのことに対して長年の研究の蓄積において回答する。理では納得できても、それにしてもどうして…との素朴な感慨はなかなか消え去らない。

今回明治初年のベストセラーとして著名な作品をこうして並べてみて、ある程度腑に落ちることがある。外観は大きな変化ではあるのだが、そこに生きる人間の営みはそれまでの生活文化と地続きであるという、なんとも自明の事実である。『<sup>あぐらなべ</sup>安愚楽鍋』の仮名垣魯文（文政12〈1829〉年～明治27〈1894〉年）が開化主義者と言われるほど、新奇な事物を次から次へと取り入れることができたのは、むしろ彼に「主義」がなかったからである。それは幕末からの際物作者の魂であり、現在のマスコミのあり方に受け継がれる精神の賜物である。その無批判ぶりには少々あきれもするが、この精神力が開化を領導してゆく。

いっぽう思想家たちはこれまでの生存基盤と新規の思想との対決のなかに、自己の新しい生きる道を模索する。儒者中村正直（天保3〈1832〉年～明治24〈1891〉年）の『西国立志編』第一編序では、儒教の徳目を基底において思考することで、西洋思想の何が価値あるものかを鋭敏に探り当てている。翻訳小説『花柳春話』を新興の知識人階級書生たちが競って読んだのも、中国明清才子佳人小説の体裁をとっていたことによる。初期の洋装本が「<sup>なんきん</sup>南京綴じ」と呼ばれたのもゆえなしとしない。

このように表面の大きな変革の基層には、日本文化の底流が脈々と存することが知られるのである。



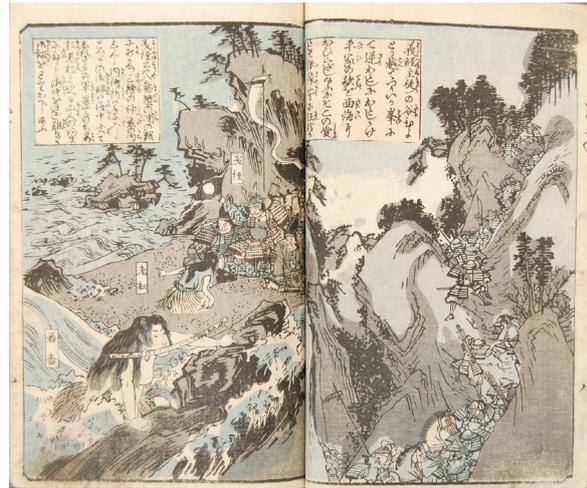
安政2（1855）年10月2日午後10時ごろ、荒川河口付近を震央として江戸で大地震が発生した。規模はM6.9と推定される直下地震であった。武家・社寺方を含めると、倒壊した家屋は2万、死者は1万人余と考えられている。翌朝速報性を旨とする一枚物の錦絵の戯文を魯文は版元の依頼によって書いた。さらに書肆の注文で<sup>けいざいせいせん</sup>溪斎英泉門下の<sup>えいじゆ</sup>英寿の助筆を得て三昼夜で脱稿したのが本書である。折り込んだ繁華な江戸の町の裏面に災害により湮滅する図が配される工夫がなされており、リアリスティックな図様に戦慄を禁じ得ない。際物作者魯文の才が際だった作である。ちなみに無許可出版であったため版元と英寿とは手鎖の刑に遭ったが、魯文の署名がなかったため彼は難を免れたという。

（参考文献）興津要『仮名垣魯文—文明開化の戯作者—』有隣堂（1993）



34 『安政見聞誌』

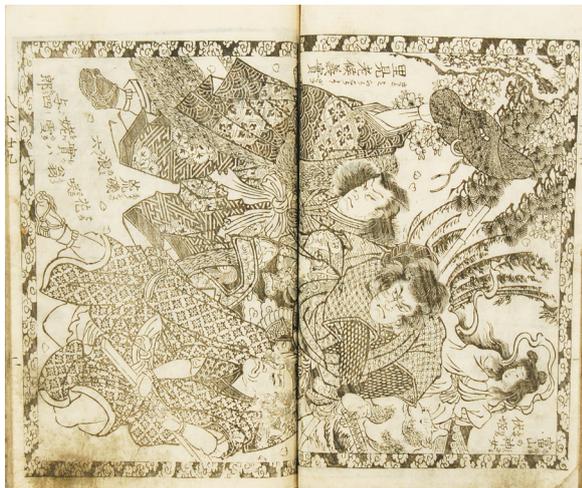
一勇斎国芳ほか画 安政2（1855）年刊 3巻3冊



35 『義経一代記画譜』

鈍亭魯文著・松園梅彦略伝・一立斎広重画 東都〔江戸〕：品川屋久助ほか 安政3(1856)年刊 1巻1冊

幕末から明治初年に掛けて魯文は生活のため売文的な戯作を量産していた。本書もそのような一冊。源義経の生涯を代表的な伝承の一場面を繋いで綴った画譜。歌川広重(初代)の絵が中心で、魯文はその場面のキャプション風の短文を綴っている。選ばれた場面は『平家物語』や『義経記』に基づくものではなく、おもに江戸期の伝承、さらには演劇に取材している。たとえば第三場面(左端図)は、「牛若丸は六誦三略の巻を見んと都に登り、鬼一法眼が学僕となり、法眼が娘皆鶴と云るをかたらひて、密にかの秘書を見つくし給ひける」とあり、菊畑で皆鶴姫を後ろに歌舞伎役者さながら見得を切る牛若丸が描かれている。言うまでもなく、「鬼一法眼三略巻」菊畑の場である。仮名垣改名(1861年)以前、鈍亭を名乗っていたころの作。



36 『仮名読八犬伝』 28～31編

仮名垣魯文作・一恵斎芳幾画 菊寿堂〔慶応2(1866)年刊〕4編2冊

滝沢馬琴『南総里見八犬伝』を毎葉絵入り、ひらかなばかりでダイジェストした合巻本。初編から16編までの為永春水、17編から27編までの鳳簫庵琴童を引き継いで、28編(慶応2<1866>年)から31編(明治元<1868>年)までが魯文の作。上記資料35と同様、生活のための売文作で、他作家の作をリレー式に引き継ぐという非個人的な仕事である。



## 37 『西洋道中膝栗毛』

仮名垣魯文著・落合芳幾ほか画 東京：万笈閣  
 (椀屋喜兵衛) 明治3(1870)～明治9(1876)年刊  
 15編30冊



4編上



6編上



7編下



8編下



10編上



14編下

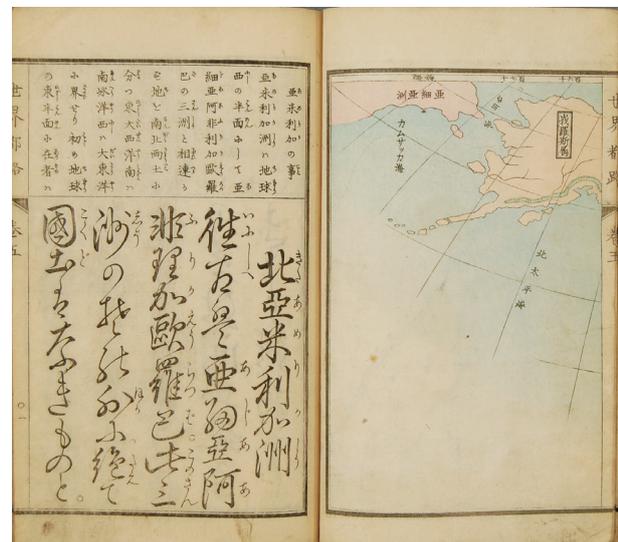
滑稽小説。11編までは魯文、12～15編は友人総生寛が後を継いだ。挿絵は初編～11編は一恵斎芳幾（五編のみ立斎広重）、12編以下は惺々暁斎（河鍋暁斎）。『西洋事情』『西洋旅案内』『輿地誌略』やフランス帰りの知人富田砂燕の体験談を下敷きに、内容、形式ともに十返舎一九『東海道中膝栗毛』を踏襲し、初代孫の弥次郎兵衛、北八が横浜の商人の供をしてロンドンの博覧会見物に行く滑稽な道中記に仕立てる。江戸戯作の伝統を継ぎ、随所に読者を飽きさせない趣向をこらしている。船旅の無聊をかこつために通訳の通次郎が太平記語りよろしく「普仏戦争」の軍談講釈をしたり（6編上）、これまでのあらすじを述べるのに、通次郎「旅日記」を引用したり（8編下）、口絵に登場人物を芝居番付風に紹介したりする（10編上）。異国情緒をもたらすものとして象やオランウータンなどの挿話も盛り込む。開化の風に乗って爆発的な人気を博し、作者自身、「僥倖に時好にかなひて、発行毎部千に下らず」（8編上凡例）、「当編、初編より引続き、御高評にあづかり、三都府は勿論なり、外客すら愛翫して、国語国文〈共に我国をさしていふ〉に通ぜし徒は、坐辺に置かざるはなし、と聞けり」（11編下）といい、魯文の名を高めしめた。12編以降、総生寛作では説教くさい箇所が増え、唐突に『論語』が引用されたりするが（14編下）、暁斎の挿絵は飄々としている。（参考文献）小林智賀平校訂『西洋道中膝栗毛』岩波書店（1958）、興津要編『明治文学全集1 明治開化期文学集（一）』筑摩書房（1966）



38 『西洋料理通』

仮名垣魯文編・暁斎画 東京：万笈閣 明治5(1872)年刊 3巻3冊

西洋料理書。横浜に居留していたイギリス人が日本の傭人に料理を命ずるときの手控え帳を種本として、魯文が明治5(1872)年に編集出版した。料理材料は英語、オランダ語と訳語で書き、「スープ」(スープ)は吸い物、キンコンフルは胡瓜などと訳している。第1章のスープの作り方から始まって、魚料理、肉料理、野菜料理、菓子の作り方で8章あり、110項目にわたって料理法が記載されている。魯文の万事こだわりのない開化主義者としての側面が如実に表れた書である。



39 『世界都路』

仮名垣魯文著・河鍋暁斎画 東京：回春楼 明治5(1872)年刊 7巻2冊

百科全書的地理書。「一(二)之卷亜細亞洲」「三之卷歐羅巴洲」「四之卷阿非利加洲」「五之卷北亞米理加洲」「六之卷南亞墨利加洲」「附澳太利洲」(巻1巻頭「世界都路目録」の表記による)からなり、各巻頭に色刷りの地図を掲載し、上段に散文による説明、下段は上段の散文内容を七五調に仕立てた本文からなり、寺子屋の教科書風に暗唱に適した形態となっている。そのため翌明治6(1873)年、文部省によって教科書として適切な書籍として例示されることとなった。

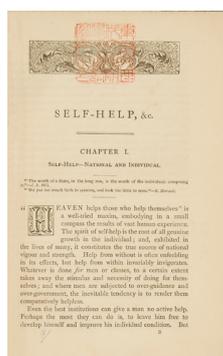


#### 40 『西国立志編，原名自助論』

ス邁爾斯著・中村敬太郎訳 東京：雁金屋清吉 明治4 (1871) 年刊 13編11冊

幕府の儒者であった中村正直（敬字と号す）によるサムエル=スマイルズ原著『自助論』 Samuel Smiles: Self Help, with Illustration of Charater and Conduct, 1859, revised edition, 1867の全訳。自立した市民たちが奮闘するエピソードが圧倒的な読者の共感を呼び、開化期のベストセラーとなる。スマイルズ (1812～1904) は、スコットランド生まれの急進派のジャーナリストとして、民衆の日常的倫理と自立的生活設計の技術を説くために、先人の逸話的な小伝記を集めて、『自助論』を刊行した。中村正直が本書を翻訳したのは、第一編序にあるように、「人民が自主の権を有する」ことが「西国の強さ」の拠るところであるとする思想に共鳴したことによる。具体的な伝記の形で、自立的な生活の理想を生々と描き出すことによって、新時代の生活理念を鼓吹したことが本書の人気の原因だと言える。慶応3 (1867) 年の幕府派遣による英国留学の帰国にあたり、友人フリーランドから原書を贈られたのが本書を知る契機であり、帰途船中で熟読したと言う。その記念として扉にフリーランドの謹呈銘を翻字する (中央図)。本学所蔵本は、表紙に「明治庚午 (3年) 初冬新刻」とあるが、13編奥付に「同人社蔵版」とあることから、明治6 (1873) 年の正直の家塾同人社開塾以降の版と考えられる。同じ同人社から明治10 (1877) 年に刊行された『改正西国立志編』は、洋装・活版の合冊本である (本学所蔵：口580-363)。金箔押しのタイトル・ピースをもつ背革装本で、背文字が入った本としてはきわめて古く、横書きになっている点も興味深い。

(参考文献) 大久保利謙編『明治文学全集3 明治啓蒙思想集』筑摩書房 (1967)，大久保利謙「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述および刊行について」『大久保利謙歴史著作集 5 幕末維新の洋学』吉川弘文館 (1986)，谷川恵一他校注『新日本古典文学大系明治編11 教科書・啓蒙文集』岩波書店 (2006)



#### 41 *Self-help, with illustrations of conduct and perseverance*

by Samuel Smiles New ed. London : J. Murray, 1876

正直の翻訳の底本は現在不明だが、ロンドンのJohn Murray社から1860年以降出版された版の一本であろう。本学には、1876年版を蔵している。

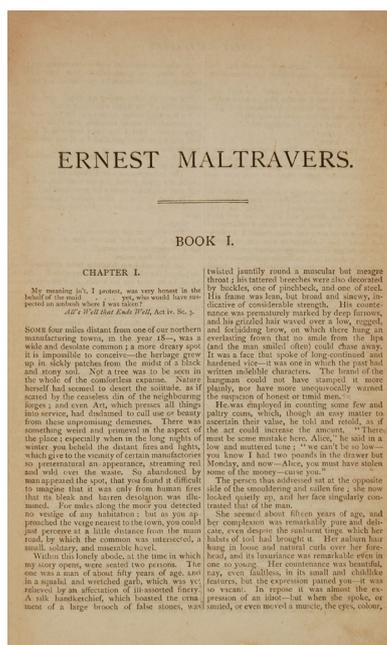


## 42 『花柳春話』

ロウド・リトン著・丹羽純一郎訳 東京：坂上半七 明治11(1878)～明治12(1879)年刊 5冊

明治初期の代表的な翻訳小説。イギリスの政治家 E.G.ブルワー＝リットン卿 Lord Lytton の小説『アーネスト・マルトラバース』 Ernest Maltravers とその続編『アリス』 Alice, or, the mysteries にわじゆんいち を丹羽純一郎が抄訳したもの。上流階級出身の主人公アーネストと庶民の家に生れた女主人公アリスが相思の間柄となり、多くの障害を乗り越え、試練にうちかつたのち、めでたく結ばれるという筋で、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスター』の流れをくむ教養小説である。原作は特に傑作というほどのものでなく、訳文も当時流行の漢文直訳体だが、西洋小説の最初の本格的な翻訳紹介として清新な感動を与え、大いに世に迎えられ、明治翻訳文学の嚆矢となった。初編刊行時の新聞広告に、「右原書ハマルツラバース、アリスト題セル欧洲有名ノ情史ナルヲ丹羽氏ノ翻訳セラレシ珍書ニシテ、従来我国人口ノ膾炙セル ムメゴヨミ 梅曆等トハ啻ニ彼是ノ風俗人情モ異ニセルノミナラズ、其手段ノ新奇絶妙ニシテ一説一話尽ク意表ニ出テ看者ヲシテ、凝眸自失スルニ至ラシムルハ、素ヨリ同日ノ論ニ非ズ。且校閲ハ服部誠一君ニシテ、成島柳北先生之ガ題言ヲ為シタレバ、文章ノ錦繡ハ亦絮言ヲ須ズ。何卒御購求ノ上一閱玉ハンコトヲ伏テ希望ス」(『東京日日新聞』明治11年10月17日)とあり、江戸流の人情本の流れにあるものの、結構の新奇さが見どころで、あわせて当時流行の漢学者、『東京新繁盛記』の服部撫松、はつとりぶしゅう「花月新誌」の成島柳北の名を冠することで、中国明清時代の才子佳人小説に淵源を持つ文体であることを揚言する、見事な文学史的視野を持った批評となっている。装丁はきわめて早い時期の洋装本で、舶来のクロスで切り返した四六判だが、表紙は四周額縁で、罫線で三分割し中央に表題、左右に作者名と刊記とを振り分ける和装本の袋紙の意匠を踏襲するもので、いわゆる「南京綴じ」である。附録も含めて5分冊であったが(参照、右下図)、本学所蔵本はそれを合冊している。浮世絵師による銅版画挿絵があり、毎葉子持ち罫に枠どられて五号明朝体活字という和洋折衷の造本となっている。訳者丹羽純一郎(嘉永4<1851>～大正8<1919>年)は三条家用人の子で、明治3(1870)年英国に留学した。明治7(1874)年帰国の船中、原著を読み「帰朝後其要領を訳述」したという。

(参考文献) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社(1961), 木村毅編『明治文学全集7 明治翻訳文学集』筑摩書房(1972), 『明治初期翻訳文学選1 花柳春話』雄松堂書店(1978), 西野嘉章『新版装釘考』平凡社(2011), 高橋修『明治の翻訳ディスクール』ひつじ書房(2015)



43 Ernest Maltravers

by Lord Lytton (Author's rev. ed.), London : G. Routledge, [1840?] 1冊

『花柳春話』の原著。初版は1837年刊行で、本学所蔵本は1940年の序文を有する、著者校閲本と銘打った、ロンドンのラウトレッジ社 Routledge's sixpenny novels 双書の一冊。刊行年不明。著者ロード・リットン (1803 ~ 1873年) は、ロンドン生まれで、政治家であるとともに多くの小説を書いた。『ポンペイ最後の日』(1834) は映画化もされた。リットン調査団団長のヴィクター・ブルワー＝リットンは孫に当たる。

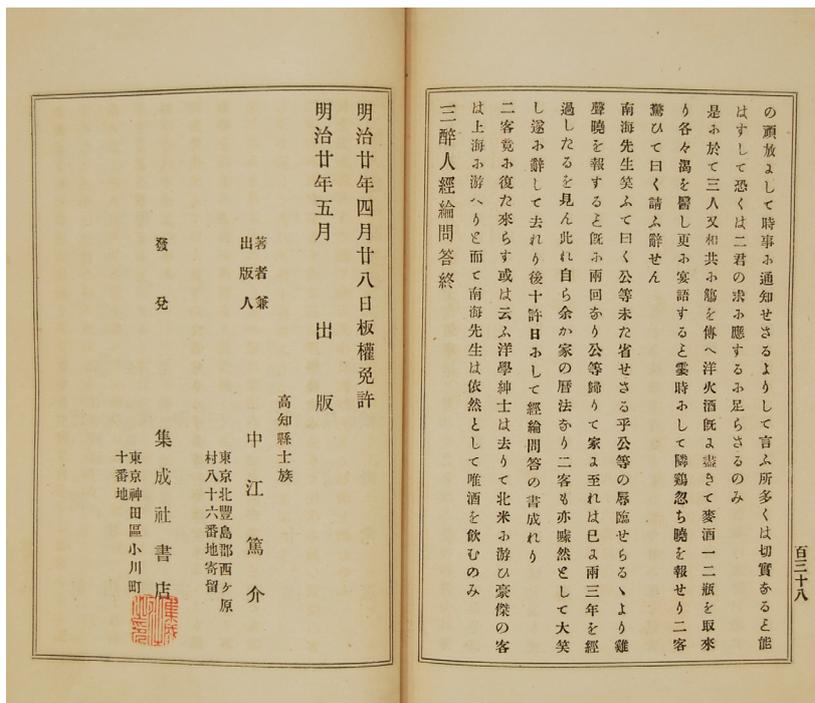
(参考文献) 山本芳明『『アーネスト・マルトラヴァーズ』・『アリス』論—『花柳春話』の原書の作品世界とは何か?—』『日本近代文学』31号 (1984)



44 Alice, or, the mysteries

by Lord Lytton (Author's rev. ed.), London : G. Routledge, [刊行年不明]. 1冊

“Ernest Maltravers”刊行の翌年1838年初版が刊行された続編。『花柳春話』はこの続編も含めて抄訳している。著者校閲本とするラウトレッジ社Routledge's 6d. edition of Lord Lytton's novelsとして出版された著作集の1冊。

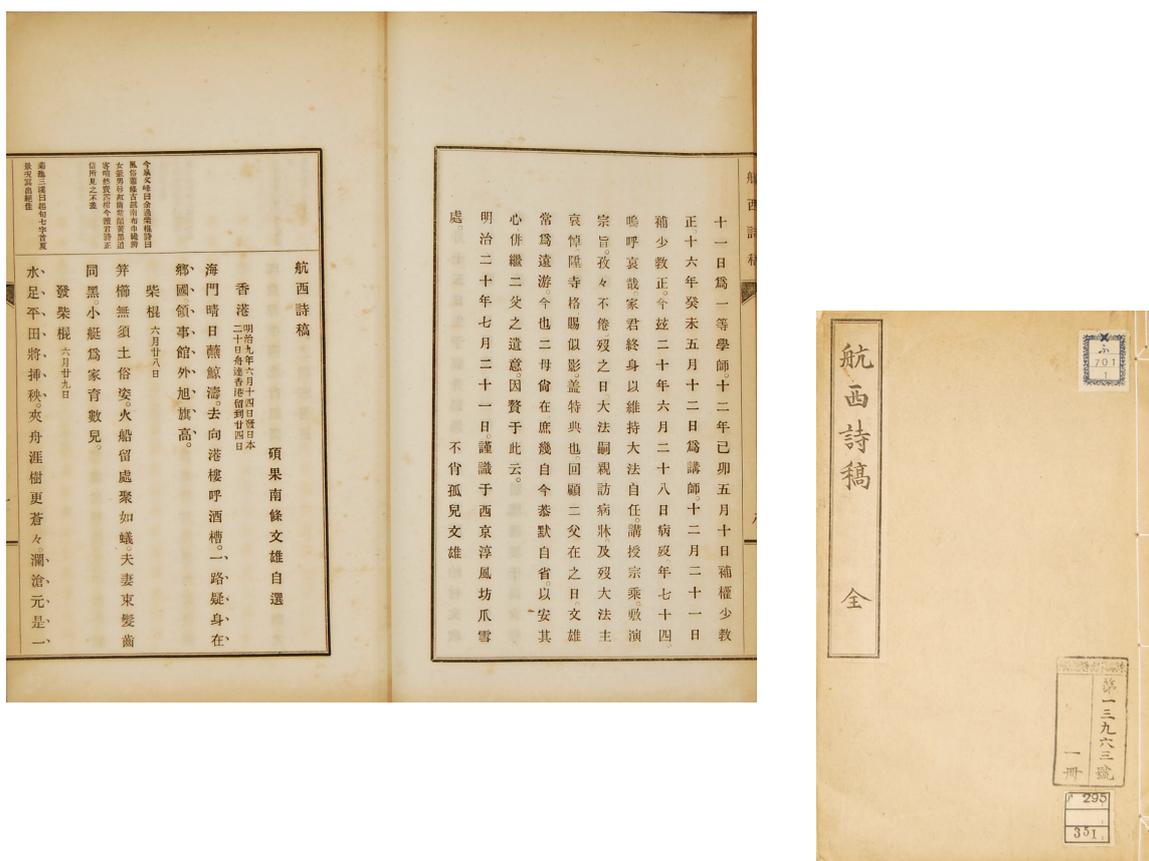


#### 45 『三酔人経論問答』

中江篤介著 東京：集成社書店 明治20 (1887) 年刊 1冊

明治時代の政治哲学書。中江兆民著。奥付の著者兼発行人は中江篤介。四六判。本文138頁、紙装の小冊子である。単行本として刊行されるに先立って、冒頭部分の数節が、徳富蘇峰の主宰する「国民之友」第3号（明治20年4月15日発行）の特別寄書欄に「酔人之奇論」として掲載された。三人の架空の人物が議論をする体裁は、古くは漢・司馬相如「子虚賦」や「上林賦」があり、空海『三教指帰』もその流れである。しかしこれらは三人が対等に議論を交わすのではなく、亡是公や仮名乞児の主張がイニシアティブをとることとなる。対して本書では、西洋近代思想を理想主義的に言表する洋学紳士、膨張主義的国権主義を代表する豪傑君、紆余曲折した思考を辿る現実主義者である南海先生の三者の考えはいずれも著者の分身的言辞を表すもので、それぞれの意見が螺旋状に立体的に組み立てられているのが特徴である。「国民之友」寄稿前夜の蘇峰の回想として、井上毅邸にふたりで赴き、本書の「稿本」を井上に繙読せしめたおりのことが語られている。井上の感想が「面白き趣向なり、併し素人には、解からぬ。とても「佳人の奇遇」程には売れざる可し」と言うものであった。まさに言う通り本書はこれまでの名著に比して当時において読まれることは少なかったが、逆に今日において人民、国家、政治に関わって重要な議論が展開されている古典的名著と言える。憲法制定、帝国議会開催の前夜に渦中の人物が本書をめぐる談笑した場面はいかにもフィクショナルだが、本書の位置づけを語るものでもある。

（参考文献）桑原武夫・島田虔次訳・校注『三酔人経論問答』岩波書店（1965）、林茂編『明治文学全集13 中江兆民集』筑摩書房（1967）、谷川恵一「中江兆民「三酔人経論問答」稿本について」『調査研究報告』37（2017）



## 46 『航西詩稿』

南条文雄自選 名古屋：池田謙吉 明治26 (1893) 年刊 1冊

近代仏教学・梵語学の先駆者、南条文雄（なんじょうぶんゆう 嘉永2〈1849〉～昭和2〈1927〉年）の初度渡英の際の行旅詩集。明治9（1876）年6月に日本を発ち、サイゴン、シンガポール、インド洋、スエズ運河を経て地中海に至り、マルセイユ・パリ経由で8月にロンドンに到着する。以降明治17（1884）年に帰国の途につくまで、オックスフォード大学でサンスクリット仏典の研究を行う。本詩集はその間の感慨を詠じたものである。晩年の『懐旧録』（昭和2年）では、オックスフォード 牛津留学時代について、本詩集の詩を解説する形で往時を振り返る叙述をしている。明治初年の海外見聞詩としては、成島柳北『航西日乗』（明治14年～明治17年）、森鷗外『航西日記』（明治22〈1889〉年）などが有名であるが、いづれも散文日記中に詩が折り込まれたものであるのに対して、本書は詩のみで構成されている。きくちさんけい 菊池三溪など当時高名な漢学者による眉批を付す。もちろん『西洋道中膝栗毛』と同じ航路を取るが、たとえばサイゴンにおいて土地の風習、貧しさに感慨を抱くなど、その逕庭は言うまでもない。（参考文献）南条文雄『懐旧録』平凡社（1979）、川口久雄編『幕末明治海外体験詩集』大東文化大学（1984）、松田清他校注『新日本古典文学大系明治編5 海外見聞集』岩波書店（2009）

## 【コラム】

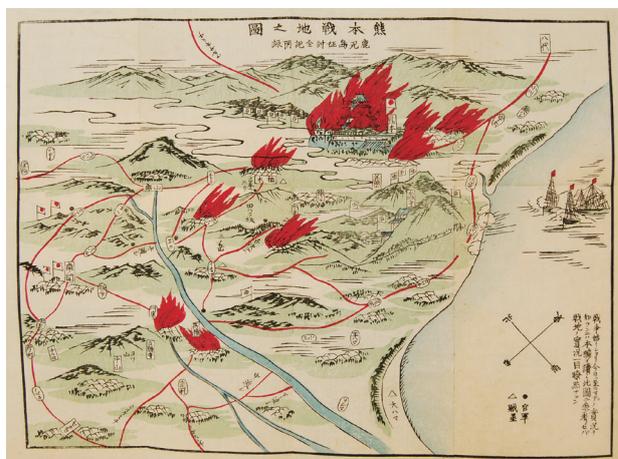
## 西南戦争と実録本

### —明治維新とメディア・リテラシー—

明治維新トップクラスの立役者・西郷隆盛。しかし彼は新政府の陸軍大将までつとめながら、西南戦争・西南の役では逆賊となってしまう。九州を舞台にした約8ヶ月におよぶ戦い、激戦の上の非業の死—この不平士族を率いた西郷の反乱に、人々の不安と好奇心は最高潮に達し、戦いの情報を渴望した。ただ幕末の戦乱期と明らかに違ったのは、開化がもたらした電信技術による情報流通システムの発展、活版印刷による新聞・書籍の出版力の増強であり、これによって人々の知りたいという欲求を各種メディアが満たそうとしたことであった。西南戦争では現地記者の走りとされる『東京日日新聞』の福地桜痴の活躍が有名だが、これは稀で、情報元は主に政府の布達や大新聞、あるいは記者たちが京都を中心に集めた巷説だったという。そしてこれらを編集したり、草双紙風に脚色した実録本が数多く刊行されたのである。

本学にはこの時期の実録本が十種ほど所蔵されている。出版の届出順に挙げると明治10年2月『絵入鹿兒島征討全記』『鹿兒島追討記』、3月『鹿兒島戦争記』『鹿兒島戦争新誌』『鹿兒島征伐物語』『鹿兒島征討録』、4月『明治十年鎮西征討記』、11年1月『参考鹿兒島新誌』、12年11月『西南征討史略』、13年11月『明治十年征討軍団記事』など。戦況の続報を月ごとに刊行するものも多く臨時の定期刊行物に近い。印刷は木版よりも活版が圧倒的に増えるのだが、装丁はほとんどが和装という折衷ぶりで、ボール表紙本や紙装本などの洋装本が登場する前の、過渡期的な出版形態になっている。題名には旧来の薩摩ではなく、また現代通用の西南戦争でもない、廃藩置県後の「鹿兒島」、さらに「征討」という文字が踊った。

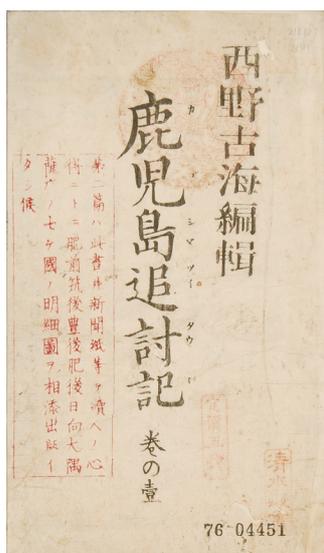
たとえば開戦直後に刊行された『絵入鹿兒島征討全記』（明治10年2月22日出版御届）の緒言には、「極南ノ暴挙ヲ伝フルヤ、人心攪動シ、其状恰モ疾風暴風ノ白日ヲ閉鎖スルガ如クニシテ、我ガ政府ヘ達セル電報昼夜数千ニ下ラス。而シテ皆暗号ヲ以テセラルルニアレバ、其精細確實ノ報ニ至テハ探知シ能ハザルモ、其巷説中、務テ信拠ス可キ説ヲ蒐集ス。然リト雖モ、未ダ訂正ノ暇アラザレバ、又或ハ謬伝訛説ヲ免カレズ。看者幸ニ夫レ之レヲ諒セヨ」とあり、九州という「極南」(!)の地の激戦に、心を乱す人々の求めに応じようと「電報」を活用したいが「暗号」ゆえに詳細が伝わらないので、信頼できる「巷説」を集めたという苦衷が語られている。



実はこれらの実録本に共通しているのは、「謬伝訛説」が混在していることを編者が読者に断っていることである。いち早く正確な情報を知りたいという近代読者の基本となる身振りは、混乱期を生きる人々にメディア・リテラシーの必要性を意識させた。西南戦争の実録本には、情報そのものの真偽を編者が何よりも意識し、なおかつ読者自身の責任のもとに受け止めて欲しいという、まさに情報化社会を生き抜くための指針の芽生えが見いだせるのである。

えいりかごしませいとうぜんき  
47『絵入鹿兒島征討全記』

井沢菊太郎編 東京：井沢菊太郎 明治10(1877)年刊 20号2冊



#### 48 『鹿兒島追討記』

西野古海編 東京：木村文三郎 明治10(1877)年刊 6巻1冊

『絵入鹿兒島征討全記』同様、出版御届は明治10年2月22日。開戦直後から刊行された実録本のひとつ。簡素な製本に報道優先の思想がうかがえる。巻1末尾に「引用書目」として『朝野新聞』『東京日々新聞』『大坂新聞』など新聞8紙をあげている。表紙に朱字で予告が見えるが、巻2（第二篇）および以降の口絵に、関連の地図や絵が彩色木版画で付されている。古海は、この反乱は私学校の「少年輩」の「過激ノ頑固党」が起こしたのだと述べ、西郷個人や不平士族たちと峻別し、「暴徒」を痛烈に批判している。巻1～18まで確認できる。本学では巻1～6をおさめた合本1冊所蔵。



#### 49 『鹿兒島戦争記』 2～7編

篠田仙果編 東京：杉浦朝次郎 明治10(1877)年刊 6冊

物語性の強い草双紙タイプの実録本の1つ。西郷の私学校の設立と生徒の暴動にはじまり、城山での西郷の最期までを、『東京日日新聞』『郵便報知新聞』等をもとに語っている。(二世笠亭) 仙果、本名篠田久二郎は他に10種近くの西南戦争ものを刊行している。挿画は当時光線画で注目を浴びていた小林清親。右図にあるような「新政厚徳（新しい政治による世直しの意）」を掲げ進軍する軍服姿の西郷像は、錦絵でも人気の構図だった。全12編12冊。本学では2～7編の6冊を所蔵。

(参考文献) 尾崎秀樹他編『錦絵日本の歴史4 西郷隆盛と明治時代』日本放送出版協会（1982）、松本常彦他校注『新日本古典文学大系明治編13 明治実録集』岩波書店（2007）

# 「長州藩士記録」「幕末関係記録」目録

筑波大学附属図書館所蔵「長州藩士記録」「幕末関係記録」は、旧東京教育大学附属図書館から引き継がれた図書基本カードによれば、同大学文学部日本史教室によって「SUZUKI」から購入され、昭和28（1953）年5月30日に登録された歴史資料（古文書）である。購入された当時は、学界で日本近代・明治維新の評価に関心が向けられ、また、長州藩がその最重要な研究対象として注目された時代である。

すべての冊に「東京教育大学附属図書館印」の印記があるが、東京教育大学時代には、他の歴史資料とともに日本史教室で保管されていたようである。すべての表紙に、同教室の助手であった故渡辺一郎筑波大学名誉教授（元 体育学系）が愛用していた帳票が貼付され、同氏の筆跡で「仮番号」（以下、この番号をNo.と記す）が算用数字で記される。

筑波大学への移送後は附属図書館と歴史・人類学系古文書室（現 大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻古文書資料室）とに分けて保管されてきた。歴史・人類学系保管分については、民衆思想史・地方史などの研究で活躍された故芳賀登名誉教授によって読解された形跡がある。

附属図書館研究開発室第5プロジェクト「附属図書館における貴重資料の保存と公開」では、平成30年度筑波大学附属図書館特別展「グローバルに挑む群像 -幕末から明治へ-」の開催を機に、山澤学（人文社会系准教授）が中心となって「長州藩士記録」「幕末関係記録」を再整理し、本目録を作成した。一部の冊では虫害による破損、料紙の劣化、綴じ糸の外れなどが見受けられ、補修を要するが、今後、附属図書館所蔵資料としていっそうの活用がなされることを期待する。

## 1. 「長州藩士記録」

『国書総目録』第5巻（岩波書店、1967年）に30冊と記載されるが、No.2は所在未詳。請求記号はヨ216-310で、東京教育大学附属図書館時代の登録記号はNo.順に和242335～和242364が付される。

大半の資料の筆跡は同一である。旧蔵者とみられるその筆者（作成者）は、伊藤信陽（No.3・12）、徹・徹忠（No.6・12）、伊藤泰・綽（No.26）、不已斎・ふい（No.7・8・10・13・17）、南湖（No.11・19・20）、楽天楼（No.15）と表記され、No.15中には「伊藤湊 当午（明治3年、1870）三十二歳」と見える。資料中には徳山毛利家から藩主家の養子となった「若殿様」（毛利元徳）の動向が詳しく、その側に出仕する藩士とも想定できるが、人名辞典類では確認できない。なお、No.23に「乾日堂蔵書」の印記があるが、これも詳らかでない。

内容は、No.1・22を除くと、嘉永7（1854）年から明治3（1870）の日記・覚書、会計帳簿、文書写、詩集である。長州藩が直接・間接に関係した八月十八日の政変、大和五条の乱、禁門の変、長州征討、戊辰戦争など幕末・維新期の事件を詳述する資料が多い。とくに日記は萩のみならず、江戸、京、大坂で記述されており、興味深い。

No.	作成年月日	表 題	作成者	形状
1	寛保2(1742)年-月-日	戌年江戸御留守番覚(〔御在所内証覚〕共)		横半帳 2冊綴
3	文久3(1863)年-月-日	備忘録(10月3日~27日)	伊藤信陽	横半帳
4	文久[3]癸亥(1863)年8月-日	立帰会計牒		横半帳
5	元治元(1864)年7月5日	備忘録(7月5日~9月1日)		横半帳
6	元治元(1864)年9月24日	日記(9月24日~12月29日)	徹	横半帳
7	慶応2(1866)年正月-日	日記(正月1日~4月14日)	不已斎	横半帳
8	慶応[2]丙寅(1866)年4月22日	日記(4月22日~5月5日)	不已斎	横半帳
9	慶応[2]丙寅(1866)年6月28日	日記(6月28日~8月30日)		横半帳
10	慶応[2]丙寅(1866)年9月-日	日記(9月1日~12月30日)	不已斎	横半帳
11	慶応[4]戊辰(1868)年初夏-日	船中日誌(4月4日~15日)	南湖	横半帳
12	文久3(1863)年正月28日	日記(正月28日~2月25日)	信陽執事 (徹忠)	縦 帳
13	慶応[3]丁卯(1867)年4月-日	日々録(4月1日~5月23日)	ふい	縦 帳
14	[慶応3]丁卯(1867)年正月-日	日記(正月1日~3月29日)	清□□人	縦 帳
15	明治元(1868)年11月-日	湊西遊留守中日記 (11月4日~明治3年閏10月12日)	楽天楼	縦 帳
16	[慶応4(1868)年]2月20日	[日記](2月20日~4月7日)		横 帳
17	慶応3(1867)年正月-日	会計帳	不已斎主人	横 帳
18	慶応[3]丁卯(1867)年11月-日	米金出入諸控		横 帳
19	慶応[3]丁卯(1867)年12月1日	金銀出入控(~慶応4年4月15日)	南湖漁人	横 帳
20	慶応4(1868)年4月15日	会計帳	南湖	横 帳
21	元治元(1864)年3月27日	備忘録(3月25日~6月5日)		縦 帳
22	[---年-月-日]	御先代より之覚書(旧記)		縦 帳
23	嘉永7(1854)年-月-日	異国船渡来雑記(正月11日~4月26日)		縦 帳
24	[---年-月-日]	午未伝信録(安政5~6年京都記録)		縦 帳
25	[文久3(1863)年-月-日]	懼説(八月十八日の政変記録)		縦 帳
26	[安政4(1857)年-月-日]	淡蕩社丁巳稿 (詩集、朱筆推敲あり)	伊藤泰 (伊藤綽)	縦 帳
27	元治2(1865)年11月-日	長防臣民合議書		縦 帳
28	[文久3(1863)年-月-日]	京師八月十八日騒動大略覚書 (八月十八日の政変記録)		縦 帳
29	[慶応3(1867)年-月-日]	[御用留](慶応3~明治元年)		縦 帳
30	[---年-月-日]	覚(〔慶応2年〕、第二次長州征伐につき)。 (〔慶応2年〕「出師檄(元治3年6月長防士民中)」・「六月十四日戦争」・[文久3年]「言上(八月十八日の政変・大和五条の乱につき)」・[年未詳]「武蔵国千住小塚原廻向院別業境内有之報告尽忠義士之墳墓」共)		縦 帳 4冊綴

## 2. 「幕末関係記録」

『国書総目録』第6巻（岩波書店、1969年）に16冊と記載され、「天明-天保雑事記・文化三正月江戸大火記事・安政二江戸大地震記事・安政四-六襍記・文久記・元治長州截許・慶応記・野州軍記・風聞密書等を収む」と註記されるが、No.15（「天明-天保雑事記」か）は所在未詳。請求記号はヨ216-311で、東京教育大学附属図書館時代の登録記号はNo.順に和242412～和242427が付される。

すべて「霊城文庫」の印記があるが、旧蔵者は詳らかでない。No.1のみ、巻頭に「唐澤尚恭」の印記があり、また、表紙に「有月所蔵」「唐澤」、巻末に「唐澤氏蔵」と書き入れられているが、霊城文庫との関係は不明である（他にも「誉」および印文不明の2印が捺される）。ほとんどは江戸時代の写本と考えられるが、No.14に「右街談文々集所載、大正五年四月廿日書了」（墨筆）、No.16に「大正五年九月廿三日於沢東中一読了」（ペン書き）の奥書があり、大正年間ごろの写本も含まれているようである。なお、No.16には、ペン書きの頭註も加えられている。

No.14以外の14冊は幕末・維新期の記録である。No.12のように軍記物的著作もあるが、大半は幕府、諸藩、諸外国から発給された文書や書状の写本に加え、市井の民衆が社会を風刺した狂歌・川柳・都々逸・数え歌なども多数書写された記録である。政治史・政治思想史のみならず、文化史の研究にも有益な資料群である。

No.	作成年月日	表 題	形状
1	[----年-月-日]	安政自己至未襍記（安政4年8月～6年11月）	縦 帳
2	[----年-月-日]	文久記 卷一（文久元年4月～元治元年8月）	縦 帳
3	[----年-月-日]	文久記 卷二（文久2年5月～9月、後欠）	縦 帳
4	[----年-月-日]	文久記 卷三（文久2年9月～慶応元年5月、裏表紙欠）	縦 帳
5	[----年-月-日]	文久記 卷四（文久3年正月～11月、裏表紙欠）	縦 帳
6	[----年-月-日]	慶応記 卷弐（慶応2年3月～12月）	縦 帳
7	[----年-月-日]	慶応記 卷参（慶応2年5月～6月）	縦 帳
8	[----年-月-日]	慶応記 卷四（慶応3年正月～12月）	縦 帳
9	[----年-月-日]	戊辰記（慶応4年正月～閏4月）	縦 帳
10	[元治元（1864）年-月-日]	元治長州截許	縦 帳
11	元治元（1864）年-月-日	下総表・水戸表・筑波山・野州表・水戸湊辺太平記	縦 帳
12	[----年-月-日]	風聞密事（安政4～5年）	縦 帳
13	慶応4（1868）年-月-日	野州軍記（乱丁あり）	縦 帳
14	文化3（1806）年-月-日	文化三年正月江戸大火記事	縦 帳
16	安政2（1855）年10月2日	江戸大地震崩出火場所	縦 帳



50 『安政自己至未襍記』幕末関係記録

霊城文庫印記

## 掲載資料一覧

番号	資料名	請求記号
1	外蕃容貌図画	ヤ 600-4
2	相模国三浦郡浦賀湊見取略図	ネ 040-85
3	横浜明細図	ネ 040-231
4	横浜案内絵図 時随改正	ネ 040-230
5	風聞蜜事（幕末関係記録）	ヨ 216-311
6	記聞 異国船浦賀江渡来一条	昌平坂 / 貴
7	阿部伊勢守（少年読本第 41 編）	ル 900- 宮 41/ 宮本文庫
8	戊午日録	昌平坂 / 貴
9	別段風説書	昌平坂 / 貴
10	安政四年丁巳十二月十八日監察触出書面并阿蘭陀条約・魯西亜貿易条約等写	昌平坂 / 貴
11	亜墨利加使節対話書	昌平坂 / 貴
12	[ 亜墨利加使節対話書 ]	昌平坂 / 貴
13	亜墨利加国条約并税則・阿蘭陀国条約并税則・英吉利国条約并税則 ・仏蘭西国条約并税則・魯西亜国条約并税則（五ヶ国条約書并税則）	ム 950-78・74・77・75・ 76/ 穂積文庫
14	江戸大地震崩出火場所（幕末関係記録）	ヨ 216-311
15	生捕ました三度の大地震（鯨絵）	726.1-N47/ 貴
16	鹿島恐（鯨絵）	726.1-N47/ 貴
17	世直し鯨の情（鯨絵）	726.1-N47/ 貴
18	午未伝信録（長州藩士記録）	ヨ 216-310
19	文久記 卷 3（幕末関係記録）	ヨ 216-311
20	京師八月十八日騒動大略覚書（長州藩士記録）	ヨ 216-310
21	懼説（長州藩士記録）	ヨ 216-310
22	三条実美公（少年読本第 4 編）	ル 900- 宮 41/ 宮本文庫
23	備忘録（長州藩士記録）	ヨ 216-310
24	覚（長州藩士記録）	ヨ 216-310
25	下総表・水戸表・筑波山・野州表・水戸湊辺太平記（幕末関係記録）	ヨ 216-311
26	文武虚实論	イ 420-256
27	本学挙要	ロ 750-89
28	[ 御用留 ]（長州藩士記録）	ヨ 216-310
29	西郷隆盛（少年読本第 18 編）	ル 900- 宮 41/ 宮本文庫
30	[ 日記 ]（長州藩士記録）	ヨ 216-310
31	坂本龍馬（少年読本第 19 編）	ル 900- 宮 41/ 宮本文庫
32	野州軍記（幕末関係記録）	ヨ 216-311
33	戊辰記（幕末関係記録）	ヨ 216-311
34	安政見聞誌	ヨ 216-205
35	義経一代記画譜	ル 156-52
36	仮名読八犬伝 28 ～ 31 編	913.57-Ka47
37	西洋道中膝栗毛	ル 160-4
38	西洋料理通	セ 700-10
39	世界都路	ル 185- 宮 278/ 宮本文庫
40	西国立志編, 原名自助論	ロ 580-582
41	<i>Self-help, with illustrations of conduct and perseverance</i>	B 580-s38/ 石川文庫
42	花柳春話	ヤ 640-1-1
43	<i>Ernest Maltravers</i>	B 550-113
44	<i>Alice, or, the mysteries</i>	F 550-112
45	三酔人経綸問答	ウ 000-175
46	航西詩稿	ル 295-351/ 那珂文庫
47	絵入鹿兒島征討全記	ヨ 380-126
48	鹿兒島追討記	210.62-N41
49	鹿兒島戦争記 2 ～ 7 編	210.627-Sh66
50	安政自巳至未禱記（幕末関係記録）	ヨ 216-311

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「 / 貴」と示した  
 ※文庫所収の図書については、請求記号の末尾に「 / ○○文庫」と示した

## 企画

筑波大学人文社会系

青木 三郎（系長）

谷口 孝介（教授）

山澤 学（准教授）

馬場 美佳（准教授）

筑波大学附属図書館

阿部 豊（館長）

谷口 孝介（副館長・研究開発室長）

鈴木 秀樹（学術情報部長）

筑波大学附属図書館研究開発室

山澤 学（人文社会系准教授）

## 附属図書館特別展ワーキング・グループ

大久保 明美（主査）

上原 由紀

木野村 和人

大樂 絢奈

竹内 夏奈子

永濱 恵理子

中原 由美子

福井 恵

渡邊 朋子

## 講演会

平成30年11月10日（土）13:30～15:30

講演者 山澤 学（人文社会系准教授）

## 電子展示Web

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2018global/index.html>

---

平成30年度 筑波大学附属図書館特別展

グローバルに挑む群像 - 幕末から明治へ -

平成30年10月29日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2018

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

ISBN 978-4-924843-91-2